

VI

外部メディアに発表した文章など



6-1 人生読本⁽¹⁾

1972年6月1日～3日、NHKにて放送せしもの

一、科学と信仰

私は物理学を勉強したのですが、その私がキリスト教の信仰を持っておりますことを多くの方が不思議に思っております。しかし私にとって物理学をやったことが信仰を持つのに大変助けになっておりまして、そのために奇蹟^{きせき}をも信ずることが出来ています。

科学とは、事物^{じぶつ}をよく見て、よく考えて、ほんとの事を、真理^{みいだ}を見出すものであります。そしてそれが真理であることを事実をもって確かめる、実証するのであります。それだけのことをしなければ科学とはいえないのであります。これだけのことをしたから月にも行って帰って来ることが出来、一秒に地球を七回り半する程の速度の光が届くのに 20 億年もかかる遠方^{えんぽう}の星の性質を知ることが出来るのであります。科学がこのように偉大なのは、よく見てよく考えて真理を求めなおそれを実証するというところからであります。

信仰も人間の世界の事実をよく見て、よく考えて、神の存在を知るのであります。世の中の事実をよく見ると神の存在を信じなければならなくなります。罪を犯した人が罰を受けるといこと、即ち悪いことをした人が何等かの形の報い^{むく}を受けるとい事実があります。いくら力の強い人でも悪い人は亡びます。弱くとも正しいものは真の意味で榮えます。これは神の實在の一番確かな証拠であります。正義の神が宇宙を支配していると考えなければ説明できない事であります。もちろん、ちょっと見ると悪人が榮えていると思われることが沢山あります。また、正しい人が苦難^あに遭っている例もあります。しかし、よく見ると榮えているように見える悪人でも何等かの罰を受けております。日本の公害問題の始まりである足尾銅山鉍毒問題の張本人の古河市兵衛氏⁽²⁾は渡良瀬川沿岸の農民をあの様に苦しめたにも拘わらず、富と権力を握って榮えたように見えますが、よく見ると彼相応^{そうおう}の罰を受けております。彼の妻が自殺しております。妻など自殺しても妾⁽³⁾を持っているから平気だったというかも知れませんが、妾^{めかけ}を持つことが実は大きな刑罰であります。また正しい人が苦難^あに遭う事実も沢山ありますが、これは刑罰としてではなく、苦難を通して高い真理を悟らせて下さるための訓練であります。私共の学園の三年生が毎年北海道へ修学旅行に参りますが、その途次⁽⁴⁾必ずハンセン病⁽⁵⁾療養所に寄り、その信者の方々と交歓会^{こうかん}を催します。患者の皆様がハンセン病という苦しみに遭われたにも拘わらず、喜びと希望^{あふ}に溢れておられまして、負け惜しみでなくハンセン病という苦難^あに遭ったからこそこの恩恵^{おんけいあふ}溢るる信仰を持つことが出来たのだ、と喜んでおられます。特に来世^{らいせ}の存在

を信ずることが出来れば、神の恩恵おんけいを受けることが出来ることは、最も確実になります。

唯物論ゆいぶつや無神論はちょっと考えると科学的であるように見えますが、よく事実を見る事をしない、よく考える事をしない。それ故最も非科学的であります。例えばアメリカの南北戦争どれいが奴隷解放の聖戦ではなくて経済的事情から生じたものであることを論証するのに、ストウ夫人の「アンクル・トムの小屋」のことや、ロイド・ギャリソンの解放のための雑誌「リベレーター」のこと等きせきを無視しております。奇蹟きせきを信ずることは非科学的のよう見えますが、科学は奇蹟きせきを否定するものではありません。ただ奇蹟きせきはめったに起こらないものだといっているだけであります。奇蹟きせきが起こってはならないという理論ゆえはありません。それ故偉い物理学者を十人選べばその内九人までは神を信じております。よく事実を見、よく考えまた真理を実証するからであります。

もちろん神の存在を理論的に証明出来ません。これは理論ですべてのことを証明できないからで、人間の理論理性には限界があります。理論理性の限界を超える真理は科学のように理論的に証明できませんが、神よりの啓示けいじによって示されます。信仰のない人々の間ではインスピレーション等といわれております。そういうもののあることはよく知られていることでもあります。理論的に証明できませんが、その真理に従って生きて見て、それが真理であることがわかります。それで哲学者のカントはこれを実践理性じっせんと名づけております。道徳や信仰の真理は実践理性じっせんによって到達し得る真理であります。理論によって証明できないからといって理論以下のものなのではなくて、理論の限界を超えたより高い真理を扱う理論以上のものなのであります。それ故に信仰をすべて迷信しりぞだとして退けてしまって、人生にとって一番大切な信仰の真理を失ってしまってはなりません。人はほんとうの信仰を一生懸命に求めなければなりません。

二、自然との対話

花を見ていると種々しゆじゆなことが心に浮かんで参ります。それは丁度花と語り合っているように見えます。それで昔から植物を擬人化ぎじんしてこれと語り合うということがよくいわれて来ました。50年位前、私がまだ東京にいました時に、基督教青年会キリストに讚美歌を練習しに行っていたことがありました。そこに少し知的障がいのある人⁽⁶⁾がよく来ておまして、事あるごとに⁽⁷⁾、「コスモスのさきやきということがわからなければ駄目だめだ」と繰り返していっておりました。なまじっか知恵すぐが優れているために、何でも合理的にしようとして、花が語るというようなことを考えられない人よりは、その知的障がい児⁽⁸⁾の方がはるかに幸福だと思いました。

自然の中に一人静かにおりますと、深く考えることができます。都会のやかましき

の中にいると、人は考える力を失ってしまいます。都会に住む人は表面は立派そうな風ふうをしておりますが、誰たれが儲もうけた、誰たれが損こしたというようなつまらないことばかり考えております。それでは犬や猫と同じではありませんか。せつかく人間にんげんに生まれて来て高い貴たかい生活くわが出来できるようになっておりながら、それらをすべて捨ててしまうなんて、考える力も何もなくした愚おろかなことではないでしょうか。英語に Far from the madding crowd ということばがあります。人を狂くるわせる⁽⁹⁾ような混雑こんさつから遠く離れてという意味です。200年にんねんも前から言いわれている言葉ことばであります。今のように公害こうぎのひどい過密都市かみつにならない時代じだいでさえ madding crowd といわれていた訳わけです。人間にんげんには madding crowd から離れて自然しぜんの中で一人静しずかに深く考えることが必要ひつやうであります。そうすれば神かみよりの啓示けいしを受けられるようになります。深い大切な真理しんりを示しされます。自然しぜんとの対話たいわを通して大おほいなる真理しんりを与たまえられます。

内村鑑三先生うちむら かんざんの短い文章ぶんしょうに「秋あきと河がわ」⁽¹⁰⁾というのがあります。こういうのであります。

秋あき到きたる毎ごとに余おれは河がわを懐おもう、二ふた箇たの大だいなる河がわを懐おもう。
 其その第一だいいちは石狩河いしかりがわなり。森もり深く、水みづ静しずかに、鳶とびは弓形ゆづりかたを為なして深淵しんえんを覆おおい、赤あか葉は其その下したに垂たれて紅灯こうとうの幽暗ゆうあんを照てらすが如ごとし。大魚たいぎよ流水りゅうすいに躍おどり、遠山えんざん其その面おもてに映ある。
 余おれは幾回いくかいとなく独ひとりり其その無む人にんの岸きしを逍遙しょうようし、或あるひは清砂せいさの上うへに立たち、或あるひは葦あしの中なかに隠ひそめて余おれの靈魂れいこんの父ちちと語かたりぬ。
 其その第二だいにはコネチカット河がわ⁽¹¹⁾なり。之これをホリヨーク山やま⁽¹²⁾上うへより望のぞんで銀河ぎんがの天上てんじやうより地下ちかに移うつされしが如ごとし。余おれは其その岸きしに太古たいこの鳥類ちりゆうの足跡あしあとを探たづね、或あるひは楓樹ふうじゆの下したに坐まじ、或あるひは松林しょうりんの中なかに入りて、異郷いじやうに余おれの天てんの父ちちと交まじわりぬ。
 静しずかなる秋あきと静しずかなる河がわ！余おれは其その岸きしに建たてられし余おれの母校もくこうを忘わすれる事こともあらん。然しかれども秋あき到きたる毎ごとに余おれに静しずかなる祈いのち禱たうの座ざを供たげし河がわを、余おれは死しすとも忘わすれる能あたわざる也。⁽¹³⁾

内村先生うちむら かんざんは石狩河いしかりがわの近くちかくの札幌農学校さっぽろのうがっこうで真まの神かみを知しり、後のちアメリカに渡わたりコネチカット河がわの岸きしなるアマースト大学あますとだいがく⁽¹⁴⁾で信仰しんずいの真髓しんずいなる、罪つみの赦ゆるしの十字架じゆうじやの福音ふくいんを知しったのであります。それ故ゆゑこの二つの大学だいがくは内村先生うちむら かんざんに普通ふつうの学校がっこう以上に大きなものを与たまえたのであります。その二つの母校もくこう以上に二つの河がわは内村先生うちむら かんざんに大きなことを為なしたのであります。自然しぜんはほんとに大きなことを為なします。自然しぜんとの対話たいわは実じつは神かみとの対話たいわであり祈いのち禱たうであります。

人が故郷こきやうを慕したうのは、故郷こきやうの自然しぜんから多くおほくのものを与たまえられたからであります。独立学園どくりつがくえんの卒業生そつぎやくせいも母校もくこう以上にその周囲しゅういの自然しぜんを愛あいして、機会きかいを作つくってよく帰かえって来きます。独立学園どくりつがくえんのある所ところは平凡へんぺんな山村さんそんであります。学園がくえんの中に小高い丘こたかいのけがありまして、

以前大きな松の木が一本ありましたので一本松と呼んでおります。今は松の木が増えて五、六本松になりましたが今もなお一本松と呼んでおります。彼らはそこから眺める景色が特に好きなようです。

人は自然の中に住むべきであります。そのような理由で農業が最もよい職業であります。私には人々が農業を嫌ってサラリーマンになりたがる心がわかりません。ただ金を儲けたい為に貴い人生を犠牲にしているとしか考えられません。

自然の中に住むことの出来ない人は、機会を作って自然の中に入って行かなければなりません。観光地では駄目です。平凡な景色の所がいいのです。そして自然との対話を持ち、人生について深刻に考えなければなりません。あるドイツ人がドイツには森がある。森の中に道がつくってあり、道の所々に腰掛けが設けてある。そこでドイツ人は考えるから、ドイツからゲーテ⁽¹⁵⁾やシラーのような人が出たのだといいました。

経済成長のために国土を荒らすこと位愚かなことはありません。たとえ公害が起これなくとも国民から自然との対話の場を奪うことはしてはなりません。経済成長は抑えるべきであります。人間が経済の奴隷になってしまっははいけません。人間のための経済でなければなりません。今日の社会を見ると人間が経済の奴隷になってしまっ、何事も人間疎外とか人間不在とかいわれるようになってしまいました。

私はいつも経済成長は神の刑罰だと申して来ました。以前は公害問題等起こっていませんでしたので、罰である経済成長の結果日本の教育が崩れてしまう、社会をよくすべき教育が駄目になることは恐ろしいことだと申して参りました。これは東大安田講堂攻防戦⁽¹⁶⁾の起こるずっと前から申して来たのでした。今日公害問題で人々が苦しんでおりますが、それでもなお、人々は経済成長をよいもののように思っなおも経済成長をさせようとしております。困ったものであります。経済成長は国民に必要なものを生産するという方に向かわないで、儲かるものは不必要なものでも作るという風になって行きます。誇大宣伝でよく売れるものを作るとか、直にこわれて早く代わりが売れるとかいうものを作るといふ風になって、国民から自然を奪うという害ばかりでなく、直接国民に害を与えます。環境庁⁽¹⁷⁾が出来て経済成長を抑えることをしておりますが、まだまだ手ぬるいと思ひます。もっと環境庁の力を強くして自然を守らなければなりません。

三、人生の岐路

種々申して来ましたが今日の人々は余り考えなさすぎます。科学と信仰は衝突するようにある人がいふと、どうして衝突するのかということ深く考えないで、今日の科学時代には信仰は不必要なものとして決めてしまっ、人生にとって一番大切な事を考えないでいます。信仰も進歩するものであります。日本の学者は、信仰はすべて迷

信だと馬鹿にして信仰のことを考えないので、幼稚な信仰しか持っておりません⁽¹⁸⁾。ある偉い法律学者が、飛行機で羽田を発つ時に、胸のポケットに成田山⁽¹⁹⁾のお守り札を入れて行ったという話を聞きました。これ等は最も幼稚な信仰であります。

経済的繁栄はよいものだと決めてしまって、考えないで経済にしばられて、自ら苦しんで行くような愚かなことをする。人が有名大学に入り、有名会社に就職するといいいると、大学でどんな勉強するのか、その会社で何をするのか、ということは考えないで、そういう人生を送ろうとする。今日の人々は余り考えなさすぎる。それではいけないので、人生如何に生きて行くべきかということを実際に考えなければなりません。

人間というものは誰でも無限の価値を持っているものであります。キリストの御言葉に「たとい人が全世界を儲けても、自分の命を損したら、何の得になろうか」というのがあります。これは実にすばらしいことでもあります。人間が人間である以上は誰でも、正しい人でも、悪い人でも、愚かな人でも、知的障がい者⁽²⁰⁾でも皆全世界とも掛け替えのない貴いものを持っているというのであります。世界の片すみにいる、人に顧みられない人でも、その人が欠けると全宇宙が完成しないという価値を持っているのであります。ですから人にはそれぞれ天職⁽²¹⁾があるのであります。その天職を見出してその遂行に努力するのが真の生き甲斐ある人生であります。

立身出世主義の人生はつまらないものです。豊臣秀吉⁽²²⁾が「世の中に我にも似たる人もがな、生きて甲斐なきことを語らん」という歌を作ったとのことでもあります。いくら出世してもつまらないものだといっても、太閤⁽²³⁾になったら何も不平をいうことなどはないでしょうと、誰も相手にしてくれない。もし自分のように出世した人があれば、その人と出世しても詰まらないと語り合って、互いに慰め合うことが出来るのにというのであります。近頃流行のエリート・コースとかエリート意識とかいう言葉位、いやな卑しい言葉はありません。そのために人間が卑しくなり、そのために日本の教育が悪くなってしまったのであります。人々は生き甲斐を見出そうと努力していますが、見出せないで苦しんでいるようであります。会社等でマイ・ホームの夢を持たせることによって生き甲斐を持たせようとする所があるということですが、そんなことでは本当の生き甲斐を見出すことは出来ません。

天職を見出すことは、その人個人々々で異なりますので一概にいえませんが、一般的なことは人は誰でも一生懸命に学問をして、自分という人格を完成して行くべきものだということです。学校はその準備をする所であって、卒業したら、これまで習った学問を基にして一生かかってほんとの学問をして行くというのが真の人生であります。

学問というのは本当のこと即ち真理を求めて行くものであります。聖書に「私たちは真理に逆らっては何をする力もなく、真理に従えば力がある」という言があります。

ますが、学問とは真理を求め人々に真理に従って生きて行くことを教えるものであります。学問というものは、人にこの世の中というものは嘘やごまかしでは生きて行けないものだということを悟らせるものであります。人間を真実にする所に学問の価値があるのであります。学問を教えて教育をするのであります。教育が人格の完成であるというのはこのことであります。

科学の価値はその応用にあるのではありません。応用が目に見える効果を上げておりますのでそれに眩惑されて応用にあると思っっている方が多いのであります。その応用によって人間の生活が少し位便利になってもたかが知れております。それ所ではなく公害等が起こって、科学の応用によって却って人々が苦しんでおります。価値が応用にあるのなら、ない方が増しであります。そうでなくて、科学も学問であり真実を求むるものであります。科学は人を真実にするものでありまして、ここに科学の価値があるのであります。自然科学者に立派な人が多いのはこの事を示しております。

それ故人は一生学問をするものであります。学問というのは学校で主としてやる理論的なものに限らない、人生を実際に生きて見て初めてわかる真理があることを前に申しました。種々の学問がありますが、そのほんとの学問をし、人間として完成するのが人生であります。そしてこの学問がよく出来る職業がよい職業であります。それから世の中のため、他の人のためになる職業がよい職業であり、ほんとの学問の出来る職業であります。自分のことばかり考える立身出世主義の人生を選ぶか、真の学問をする人生を選ぶか、これが人生の岐路であります。人はこの時に正しい人生を選び、秀吉の如く後悔する人生を選ぶことのないようにしなければなりません。

6-2 わたくしの信仰と生活

私は山梨県の今は大月市に編入されている村で 1899 年に生まれました。二歳位の時に親をバカと言ったため、父に家の前の瓜^{うり}(²⁴)畑に捨てられ、番頭^{ばんとう}(²⁵)が抱いて連れ帰り、謝ってくれたことがありました。家は 800 年以上も続いた旧家ですが、身分のよい家に生まれたということは誇りとすべきことではありませんが、幼い時から道徳的な^{しつけ} 躰^{もら}をして貰った^{まこと} ということは誠に^あ 有り難い^{がた} ことでもあります。愛^{しか}をもって叱^{しか}ってくれる親を持つ^こ ということは幸福な^じ ことで、孤児^{あま}の不幸^{しか}は叱^{しか}ってくれる親を持たない^{しか} ことでもあります。それなのに近頃の親は子供^{あま}を余り叱^{しか}らないで、うるさいことをすれば叱^{しか}るが、悪いことをしても叱^{しか}らない。これはお互いの不幸^{しか}であります。親に子を愛する情が不足しているのではないのでしょうか。唯物思想^{ゆいぶつ}に禍^{わざわい}されて親子の愛の関係を利害の関係にしてしまったのでしょうか。

父は甲斐絹^{かい き}(²⁶)問屋^{どん や}をしておりまして、東京に店があり、山梨県の家との間を往復しておりましたが、長姉^{ちやうし}に婿^{むこ}をとって山梨県の家^かの監理^{かんり}を任せることが出来るようになりましてので、小学校五年の時に家族全部東京に移りました。学校の成績^{ほう}はよい方で、六年間六回優等賞^{ゆうとうしょう}を貰^{もら}いました。中学校は慶応^{けいおう}の普通部^{ふつぶ}(²⁷)でやりました。中学時代に当時は数少なかった博士^{はかせ}の先生にも教わったり、よき友人にも恵まれ、人生の問題を真剣に考えました。ただ単に立身出世してもつまらない、学問の研究は、よし⁽²⁸⁾それがどんなに小さなものであっても、永遠の価値あるものだから、学問の研究を自分の一生の仕事としよう^とと決心しました。そして学問の中の学問と^と言われている物理学を選びました。物理学がその頃、真空放電、X 線、放射性元素の発見、相対性原理等とすばらしい発展をしたことも理由であります。官学^{かんがく}(²⁹)はその頃も嫌^{きら}ったのですが、他に物理学をやる所がないので、第八高等学校⁽³⁰⁾から、東大の物理に進みましました。

1919 年 8 月、八高在学中に父が亡くなりました。商業^{ほう}の方は若い義兄^{ぎけい}に任せて勉強を続けました。翌年 9 月から東大で物理学の勉強を始めました。学年のきれ目を 7 月から 4 月に切り変えられたので、始めの年は短くて充分勉強が出来なくて損したように覚えています。東京の郊外にイタリアのヴィラ⁽³¹⁾風の住宅^{せいたく}を建てました。贅沢^{ぜいたく}なバカなことをしたものと後悔してありますが、設計^{おうみ}を近江兄弟社^{おしみ}を創立したヴォーリズ⁽³²⁾先生に頼み^{たの}みしたので、キリスト教と接するきっかけになり、家が完成してもなお親しく交際^{おしみ}していました。近江兄弟社の宗教運動には感心しておりましたが、私のように最高の学問の出来る者には宗教は必要ないと考えておりましたが、物質的なエリート意識はつまらないと知ってはいても、精神的エリート意識^{とら}に捉^{とら}われていたことは恥ずかしいことながら否定出来ません。贅沢^{ぜいたく}な家を建てたこと等はその証

抛です。一家の運営をちゃんとやって行くのも、商業を理想的にやるのも、20歳そこそこの若年じやくねんの者には荷が勝ち(33)すぎましたので、大学を一年休学致しました。復学して間もなく1923年9月の関東大震災(34)が起きました。家族には危害はありませんでしたが、精神的にも物質的にも大きな打撃で人生の問題を深刻に考えさせられました。立身出世が愚かであることがわかっており少しは人生がわかったつもりでいましたが、なま半可(35)なものでありました。

以前からヴォーリス先生（後に帰化して一柳米来留とられました。）は私のような者は内村鑑三先生の指導を受けたらいいと考えておられて、東京にいて内村先生の講演を聞かないなんてバカはないと**すす**めておりました。それで遂に決心して1924年1月より内村先生の講演に出席させて頂きました。今まで想像していたキリスト教とは違った、真理なるキリスト教に接して、人生についての考えが一変しました。全宇宙の創造者が人格的な方であり、かつ義ぎにして愛いまに在たまし給うおほということは大いなる喜びであります。しかし聖なる神を知ると自分の汚けがれに気が付きます。私は他の人のように立身出世主義ではないと内心誇ごうまんっておった、傲慢つみにして愛のない最大の罪人つみびとであることに気が付きました。

醜みにくいエリート意識の人間でありました。エリートたる自覚は、人を自肅じしゆくさせるといよいよ面もありますが、それも体裁ていさいを飾るためのもので虚しい自惚うぬぼれであります。この罪人つみびとのかしらがキリストの十字架の苦難による贖あがないによって、すべての罪から救われるということは最大の喜びであります。キリスト教の信仰は福音ふくいん（喜ばしい音信の意）といわれております。このことを悟らせた信仰の真理ほうの方が物理学の真理よりも偉大です。内村先生の講演に魅せられ、先生の著書を貪り読み、若き血を燃やしました。一生を賭けて、信仰の真理を探求して行こうと決心しました。新約聖書の原語のギリシャ語も、旧約聖書のヘブライ語も勉強しました。ダンテ(36)の神曲しんきよくを原語で読みたいためにイタリア語もやりました。

聖書は研究すればする程ほど深い意味が湧き出て来ます。キリストの言ことばに「たとい人が全世界をもうけても、自分の命を損したら、何の得になろうか」というのがあります。人間が人間である以上は誰でも、知的障がい者(37)でも、悪人でも皆、全世界とも掛かけ替えのとうとない貴いものを持っているのであります。神の子キリストがご自分を犠牲ぎせいにしても救う程の価値を持っているのであります。このことがわかりまして「身分の低い者や、軽んじられている者、即ち無すなわきに等しい者」を心から尊敬することが出来るようになりました。山の中の辺地へんち(38)に住む人を、都会あに在いって威張いばっている人より尊敬し、愛しております。虚栄心きよえいに捉とらわれている都会の人や、身分の高い人を却かえって気の毒なに思っております。

1926年3月大学を卒業し、12月に徴兵ちようへいのために高射砲こうしゃほう(39)連隊れんたい(40)に入隊、1927年即ち昭和2年9月に除隊になり、翌28年（昭和3年）から母校の東大理学部物理学教

室に勤めることになり、贅沢な家は売って小さな家を建てました。1930年（昭和5年）3月に内村先生が亡くなりました。その翌年結婚致しました。先生の亡くなった後、どういふ伝道法をとるべきかと考えました。信仰の母体が教会や寺院であると形式に流れ易く、信仰のなくなった教会は中世のヨーロッパの教会の如く大きな害を流します。学校が信仰の母体であれば、信仰がなくなっても害が残らないし、学問を本当にすれば最後にはキリスト教の信仰に到らざるを得ないと思いますので、学校をもって伝道することに致しました。日本では教養の高い、考える力のある人が深く考えることの出来ない都会に住んでおり、考える力のない人がよく考えることの出来る農村にるので高い文化を築くことが出来ないのだと思い、農村に住む人々に高い教養を与えるために農村に学校を作ることに致しました。

内村先生の命によって夏だけ伝道に来ていた小国町の、そのまた山の中の叶水に学校を建てることに致しました。1932年（昭和7年）に大学を辞めて準備をし、1934年（昭和9年）9月に三人の雇った人に聖書と英語を教えることから教育を始めました。6年にわたる応召⁽⁴¹⁾等で中断され、終戦になりました。何百万という貴い生命の犠牲によって、暗い軍国主義の時代が去り、日本は明るい、希望に満ちた平和国家として生まれ変わりました。新しい教育制度も出来ましたので、基督教独立学園高等学校として1948年（昭和23年）5月再出発し今日に到りました。教育が崩壊した今日、神のお護りによって、ほんとの教育を守り通して来ることが出来て感謝にたえません。また日本中の人々が東京へ、東京へと集まろうとしている時に、40年前に既に東京から農村に移ってきたこと、人の真似をせず日本の経済に巻き込まれないで、私独自の道を歩んで来られたことに、大きな喜びを感じます。

（「ヒューマンサービス」、1972年8月）

6-3 裸の王様の童話

今日は日本中の人々が有名大学に入り有名会社に就職することを、人生で一番よいことだと思込んでいて、有名大学に入りたがっている。その為に競争が激しくなり、ほとんどの学問をしては入れないので、学問をそっちのけにして受験技術を身につけることに夢中になっている。それ故に、大学では学問の出来る人を締め出して、学問の出来ない人を入れるという愚かなことをしておいて、有名大学の卒業生が、一層学力がないという奇態な現象が起きている。

ある人が、自分の子弟を是非東大に入れたいと言っていた。その理由は、その人の近くの高等学校の校長先生が、誰が見ても、その資格のない人であるが、東大を出たおかげで校長になっている。そのように自分の力以上に出世出来るからと言うのである。しかしこれはまことに愚かな考えである。

アンデルセン⁽⁴²⁾の童話に「裸の王様」というのがある。詐欺師がある国へやって来て、すばらしい織物を織ってやると言っていて、ありもしない織物を織っているふりをした。そしてこの織物は愚かな人と、地位に相応しくない人には見えないと言ったので、王様を始め、大臣、学者など、偉い人々が、自分は馬鹿だとは思っていないが地位に相応しくないかも知れないと心配し、それが知れては困ると思っていて、皆、ありもしない織物を、美しい模様だ、すばらしい織物だと言っていて、とうとう王様は、ありもしない王服を着たつもりになって、裸で行列をしたというのである。国民も皆裸の王様を見て、王様の服は立派だ、すばらしいと言った。ある一人の子供が子供心に、ありのままの裸の王様を見て「王様は裸だ」と言ったので、皆が、織物などなかったのだと気がついたという童話である。相応しくない地位につくことは愚かであると同じ位不幸なことである。その校長さんは校長室ではどんなに威張っているか知らないが、陰で校長の資格がないと言われていて、時にはそれが耳に入るだろうに、それでも校長になれてよかったと思っているのだろうか。

佐藤栄作氏は「運がよかったから、八年も総理大臣をして、大勲位⁽⁴³⁾という勲章を貰った。」と言ったという話である。しかし、実は佐藤さんは相応しくない地位に八年もついておいて、愚かと同じ位不幸だったのである。運がよかったのではなく、実は運が悪かったのである。だから奥様を撲つたり—残念ながらこれは世界中に有名になった—、辞める時には新聞記者と喧嘩したりしたのである。自分の不幸にさえ気がつかないのが最大の不幸ではないか。何で苦しむのかわからないで、ただ苦しむのである。私のこの文章を読んだ方々の大部分は、そうは言っても佐藤さんは日本一の幸福ものだ、八年も総理大臣をしていたのだからと言うのではないだろうか。子供心にならないと、人間というものは本当のことが判らないと見える。賢いと自認

している人がよく大きな誤^{あやま}りをする。日本中^{こんにち}の人が今日は裸の王様の国の人々のように、真実を見ることが出来ないで、だんだん困るようになって来ている。

豊臣秀吉は大変利口だったから、さすがにこのことが判^{わか}っていたようである。秀吉の歌に

世の中に我にも似たる人もがな 生きて^{か い}甲斐なきことを語らん

というのがある。秀吉がいくら太閤^{たいこう}になる程^{ほど}出世してもつまらないと言っても、そうは言っても太閤^{たいこう}になったら何も不平を言うことはないでしょうと、誰も相手にしてくれないので淋しい。もし私と同じように百^{さび}姓^{ひゃくしやう}から太閤^{たいこう}になった程^{ほど}出世した人があれば、その人は出世してもつまらないことがわかっているだろうから、互いに話し合っ^{なぐさ}て慰^{なぐさ}め合うことが出来るという意味である。

秀吉ほど賢^{かしこ}くなくとも、誰でも少し考えればわかることである。結局^{こんにち}今日の人々は自分の考えは間違っていないと決めてしまって反省しないから、わからないのである。王様が裸であるのに気がつかないような愚かなことをしているのである。

(「ヒューマンサービス」1974年4月)

6-4 処士横議

日本では著名な人のいうことはつまらないことでも聞くけれども、いくら重要な意見でも無名人の言には耳をかさない。それ故に、学者はいい加減なことをいっても通用するので、よく研究して真理を語ろうとしないし、政治家もごまかしの議論をする。まことに困ったことである。

数年前、東京の大新聞に、ある著名な作家が「処士横議」という文章を投書した。処士横議とは孟子⁽⁴⁴⁾の言で、責任の地位にいない野人⁽⁴⁵⁾が、無責任な事を勝手に述べるという意味で、それではいけないとっているのである。その知名⁽⁴⁶⁾の作家は、この言葉を引用して、責任の地位についていない人が勝手に論議してはいけない。防衛問題は防衛専門家にまかせて置けばよいので、素人が勝手に国防問題等を論じてはいけないという意味の事を述べたのである。これは誰が考えても軍部独裁に到らせる非常に危険な発言である。言論抑圧を望む声である。

これを、平和を愛し、軍部と戦って来たと自任している大新聞が載せたのである。内容をよく理解し得ないで、ただ有名人の言だからといって載せたのであろう。これは困ったことであると思ったので、私はただちに反対論を投書した。ところが言論の自由を重んずる新聞の立場から考えても、無論載せると思ったのに没書にされてしまった。

責任の地位にいない人にはいくらでも言わせて置けばよいではないか。言っていることが誤っておれば採用しなければよいし、正しければそれを取り入れればよいので、なるべく自由にいわせるのがよい。これが民主主義のよい点である。

責任の地位にある人が、万一誤った考えを持ち、それを実行したら、国家として大変なことになる。どんな人でも考え違いをしがちであるから、責任の地位にある人は多くの人の意見を聞いて反省する必要がある。政党も同じである。専門家という者はとかくその専門の立場にとらわれて、片寄った考え方をしがちであるから一層注意する必要がある。

孟子が、処士横議を困としたのは孟子の欠点である。孟子は処士横議をきらって、いわゆる異端学派を攻撃したのであるが、異端学派の中にも孟子より進んだ倫理思想を持った人がある。少なくとも墨子⁽⁴⁷⁾は異端として排斥されたが、孟子以上の思想家である。墨子は平和論を唱え、博愛説を説いた。

私は孟子が好きである。彼は愛すべき人物である。「天下の広居に居り、天下の正位に立ち、天下の大道を行く。志を得れば民と之に由り、志を得ざれば独り其の道を行く。富貴も淫すること能わず。貧賤も移すこと能わず。威武も屈すること能わず。此れを之大丈夫と謂う。」という文章は孟子の面目躍如たるものがある。しかし、処士

横議おうぎをきらったが故ゆえに、その思想は発展せず、封建制度ほうけんの支持に役立ったくらいで終わってしまった。処士しよしに大いに横議おうぎさせて、反省みづかし、自らあやまに誤りがあったらこれを正してゆくことをしたら、孟子もうしほどの人間であるから、素晴らしい学問が出来たであろうと惜しい気がする。ほんとの学問というものは、反対意見をよく聞くことをやって初めて出来るものである。このことを悟ったソクラテスは学問の祖といわれている。「汝なんじ自身を知れ」ということ、すなわち、己おのが愚かさを悟って謙遜けんそんになることが、ギリシャ精神の基調であり、学問の基である。科学の世界では研究したものを学会で発表し、多くの人に討論もらして貰あやまって、誤りがあったら訂正してゆく这件事情ことをしているから、月にも行って来ることが出来たのである。自分は偉いぞと考えて他の人の意見を聞かなくなると人は愚かになる。学者も、政治家も自分は偉いぞと思いつているから、今日こんにちのように困った時代になったのである。

(「山形新聞」1972年6月5日)

6-5 矢内原先生の独立学園訪問

矢内原先生は基督教独立学園のことを常に心に留めておって下さった。1960年1月、火災にあって寮に使用していた旧校舎が焼失した時に重い御病氣中だったにもかかわらず大変御心配下さり、御救援の手を差し延べて下さった。独立学園は大方⁽⁴⁸⁾の御同情により速やかに復興し、9月には復興感謝の式をすることができた。10月に山形市へ御出になった時、御礼を兼ねて御病後の先生に御目にかかりたく小国の山中より出かけて『嘉信』⁽⁴⁹⁾読者会及び山形大学の御講演に列席させて戴いた。その時、先生は今度は行けないがぜひ復興した独立学園を見に行きたいとおっしゃって下さった。翌61年1月、出京の際お宅を御訪ねした時には今年も行けそうもないとのお話で諦めておったが、3月の内村先生記念会でお会いした時には5月に行くから一週間ぐらいの予定を建てて欲しいとおっしゃった。独立学園は不便な山奥であるから小関充君の車でお迎えしたいと申し上げたら、素人運転であぶないのではないかと御様子でしたが、私が何遍も乗せて戴いて上手なことはよく知っています、その上信仰を持っておられるから信頼できますと申し上げたら満足そうになされた。帰って早速、山形大学の前野正兄⁽⁵⁰⁾に連絡して予定を建てることにした。独立学園から山形に出て、月山の新緑を見て鶴岡へ抜けて諏訪熊太郎氏⁽⁵¹⁾を訪ねたい御意向であったが、月山を越える道路はその頃はまだ通れないとのことで、山形市での講演会と共に取りやめて、神町⁽⁵²⁾の小関宅に寄り関山峠⁽⁵³⁾を越えて作並⁽⁵⁴⁾で一泊二日⁽⁵⁵⁾の聖書講習会を持つことにして、先生の御諒解を得た。

5月15日朝急行で上野を出発された先生を米沢駅でお迎えした。東京よりは日暮勝英兄、山口矩子様⁽⁵⁶⁾、陳茂棠氏⁽⁵⁷⁾夫人が同行された。米坂線に乗り換えて戴き、南米沢駅で橋爪きぬ様⁽⁵⁸⁾、佐藤のぶ様⁽⁵⁹⁾が私たち一行に加わった。佐藤様は幼時くる病⁽⁶⁰⁾にかかり肉体が弱く歩行も不自由であるが『嘉信』も初号からの読者である。

伊佐領駅⁽⁶¹⁾へ着いて、待っていた小関君の車に乗り、新潟県から先生に会いに来た佐藤司郎⁽⁶²⁾、白崎裕介⁽⁶³⁾両君も同乗し、9キロの道をたどって5時頃まだ初夏の日の高い頃に学園にお着きになった。生徒一同は学園の入口である旧校舎跡の所まで出迎えた。先生も下車されて生徒等と共に新校舎まで歩まれた。先年建った新校舎や復興成った望寮、平和寮を御覧になって喜んで下さった。

平和寮の一室を先生の部屋にして休息して戴く。夕食後先生と職員との懇談会を持った。御入浴には私も御一しょにさせて戴いて背中を流して上げた。雑談の中に先生は「来年は内村先生の年だ、長生きするだけが能ではない。」とおっしゃった。半年後の御昇天⁽⁶⁴⁾を予感されたのであろうか。12月下旬、御危篤の報せを受けてから、召された⁽⁶⁵⁾報せが来るまで、間があったので、これはあるいは1月まで保たれ

るのではないかと思った。それは内村先生は数え⁽⁶⁶⁾の70の年の3月御誕生の月に召されたのであるが、矢内原先生の御誕生は1月であるので1月まで生き延びられれば慕^{した}っておられる内村先生と同じく数えの70の誕生の月に召されることになるからである。しかし12月のうちに召された。それ故、月で計算すると内村先生は満69年1ヵ月、矢内原先生は満69年ということになる。

翌16日早朝、先生が見えないという者があったので、捜^{さが}して廻^{まわ}ったら新校舎の下の用水路の傍の、折から満開の山桜の下におられて、私の方を見て合図をなされた。昨夜はよくお眠りになったとのこと、崖^{がけ}の下の河原^{かわら}にも行って来^{よし}られた由であった。

朝礼は平常通り行ない、午前中は先生のための時間にして全員二階の大教室に集まった。まず先生のお好きなさんびか One sweetly solemn thought を英語で Solemnity の譜^ふで歌った。先生はコリント前書^{ぜん}3章10節以下を御読みになって、昨年の火災の時ここを思い出した。学校もキリストを土台とすれば焼けてもなくなる。人生もキリストを土台とすれば、どんな困難にも打ち勝てる、と教えて下さった。続いて生徒や村の老人の方の質問、非武装平和や理想と現実の問題、祈^{のみ}っても神の御心がわからない時どうしたらよいか、という質問に懇切にお答え下さった。

先生のお話の後、絵画部で作った「学園の歴史」という影絵物語⁽⁶⁷⁾を見て戴^{いた}き、それから学園の名所である裏の山の一本松まで登^{いた}って戴^{いた}いた。ここは生徒が何かというところで行く所で最もなつかしい所である。一本松から降りて休んでおられる先生に休みながらコーラスを聞いて戴^{いた}きたいと申しあげたら、それならちゃんと聞くとおっしゃってわざわざ二階の教室まで昇^{のぼ}って聞いて下さった。

午後1時頃神町へ向かって出発なされた。山口矩子様は絵の授業をして下さる為に残^かられた。お陰で校長始め多くの職員が作並の講習会に出席することができた。先生の御手伝いをしておられるしげさんの荒砥^{あらと}⁽⁶⁸⁾の実家を訪ねたいが、所をよく聞いて来なくて残念だった、とおっしゃったので、調べて差し上げることにして、荒砥高校の谷口君に電話で問い合わせたら、谷口君の奥様の御実家であって、しげさんは谷口夫人の妹であり、先生の御出でを親類揃^おってお待ちしているとのことであった。神町小関宅までの行程を汽車にするか自動車にするかで迷ったが、小国郷から外へ出る宇津^う津^つ峠^{とうげ}も県の土木部長の好意で雪解け後の修復を急いで貰^{もら}い、通れるようにしたし、白鷹山を越える狐越⁽⁶⁹⁾は眺望がすばらしいので月山の新緑を諦めた先生に喜んで戴^{いた}けるし、何よりもしげさんの実家がある途中であること等の理由で自動車をおすすめしたのである。先生はしげさんの実家を訪ねるといふ愛の行為を先にされるので、自動車による行程を選ばれた。片洞門⁽⁷⁰⁾の奇勝⁽⁷¹⁾、宇津峠の眺望を喜ばれ、今泉駅で仙台へ急行する陳夫人と米沢へ帰る橋爪様、佐藤様と別れた。荒砥町の入口のしげさんの実家では親類も集まっていて心からの尊敬と感謝をもって先生を迎えた。予定より大分遅れたので短時間で出発した。狐越では月山や朝日連峰の遠望がすばら

しかった。山形市を^へ経て^{じんまち こせき}神町小関宅へ着いたのは8時頃であった。

何といっても今日のドライブは^ご御病後の先生には無理であった。17日の^{じんまち さくなみ}神町・作並
^{せきやまとうげ}間の関山^{あくろ}峠越え、特に^{あくろ}仙台側の悪路と共に先生のお疲れを^{はげ}烈しくした。作並の^{さくなみ}講習
会を終えて^{ひぐらしけい}仙台で先生と日暮兄とをお送りして以来、先生のお疲れが気にかかってな
らなかった。

(「^{やないはら}矢内原忠雄 — 信仰・学問・^{しょうがい}生涯 —」1968年)

6-6 矢内原先生の愛

矢内原先生の葬儀に参列しまして内村先生の「グラッドストーン氏の死状と葬式」という文章を思い出しました。グラッドストーンは1898年5月に死に、7月に内村先生が東京独立雑誌⁽⁷²⁾に発表されたものであります。その文章の終わりの方に葬列のことを述べて、前半は英国の権威と智識と道德との代表者で満たされ、葬列の後半部は遺族に続いて

残余は彼の親友、親僕、石炭掘り、日傭人、馭者、馬丁、工夫、園丁有りとあらゆる平民の代表なりき。前半列に依て判ずれば帝王の葬式の如く、後半列に依りて推測すれば或は村老の葬礼かと疑わる。平民は彼に由りて高く、貴族は彼に依りて低し

とあります。矢内原先生の告別式も政治家とは別であります、日本の真の意味の権威と智識と道德の代表で満たされましたが、同時に日本の各地から、片田舎からも先生を慕う人々が多く集まりました。数人の弔辞を述べた方の中でも鹿児島県の敬愛園⁽⁷³⁾の井藤道子さん⁽⁷⁴⁾の言葉が最も人々の心を打ちました。先生は現世的にも出世なさいましたが、それに拘わらずに日本各地の苦しめる人、病める人、悲しめる人の友となって機会ある毎に自ら訪ねて慰め、力づけられました。

山形には特に度々御出で下さいました。昨年5月に御出で下さった時には、まず山の中の小さな基督教独立学園に御出でになり、最後には仙台市で病める友佐々木良伍⁽⁷⁵⁾夫妻を訪ねられました。誠にいと小さき者にまで愛を注がれました。

先生のこの深い愛はどこから来たのであろうか。いうまでもなく罪の赦しの十字架の福音を通して示された神の愛の「広さ、長さ、高さ、深さ」の如何ばかりなるかに動かされてであります。先生は内村先生の門に入られて間もなくルツ子さん⁽⁷⁶⁾の葬式に列し、埋葬の時に内村先生が「ルツ子さん万歳」と叫ばれたので信仰とは生命がけのものであると感じられた由であります、ごまかさず人生を視られ、深刻に己が罪を悟られ、キリストの十字架の贖いによる罪よりの救いを身をもって体験され、己が救いの為にキリストを賜った神の愛に励まされて、「神がこのように私たちが愛して下さったのだから私たちも互いに愛し合うべき」だと多くの人を愛されたのであります。先生の愛が深刻な罪の悩みから救われた喜びから来ていることは明らかであります。昨年山形へ参られた時の座談に先生は東大総長になられて最初の卒業式の時に乾杯をして居られる写真が新聞に出たことを大きな失敗をしたとって話されました。勿論コップにはビール等は注がせにはならなかったのです。ジャーナリズムに利

用されたのでありますが、先生がこの事をこんなに真剣に悩んで居られるのを知って厳肅な気が致しました。実は私もその写真を新聞で見た時は少し不満に感じたのでありますが、このお話を伺って不満に感じたことが恥ずかしくなりました。こんな事にもこのように深刻に悩まれたのであります。そしてその悩みが深刻であればあるだけ十字架により救われた喜びが大きく、あの献身的な伝道となり、片隅の小さな者まで愛する大きな愛となったのであります。これが矢内原先生が真に偉大であった点であると思います。先生にこの深い罪の悩みを体験せしめ、このように大きな愛を実践せしめ給うた神を讃美せざるを得ません。

（「矢内原先生と山形」1962年12月）

6-7 メレル先生と私

メレル先生と私の友人としての交わりは、44年前、私がイタリアのヴィラ風の家を建てるために、ヴォーリズ建築事務所をおたずねした時から始まった。その家が完成してからも私たちの友情は続き、私は先生が東京へおいでになった時には、ほとんどいつもお会いしておった。

その頃、私は物理学者になろうと考えていた。普通の意味で出世するというのではなく、永遠の値打ちを持った象牙の塔⁽⁷⁷⁾を建てること（学問をすること）が私の理想だったのである。私は、メレル先生と先生の福音的^{ふくいん}なお仕事には感心しておった。けれど、私のように「科学の中の科学」を研究する能力のある者には、どんな宗教も必要がない、と思っていた。だから先生は私のことを、無神論者か、あるいは不可知論⁽⁷⁸⁾者だと言っておられた。先生は私に、内村鑑三先生の聖書講義に出席することをお勧め^{すす}くださった。そこで私は、1923年の東京の大地震の数ヵ月後から、その講義に参加するようになった。そして私の霊の目は、内村先生によって開かれたのである。私は自分の罪が、イエスの十字架によって、完全に赦^{ゆる}されていることを知った。福音^{ふくいん}の真理が、物理学の真理よりも大きいことを知ったのだ。私は、自分の理想を変え、福音^{ふくいん}の真理を学ぶことを心に決めて、残りの大学生活はそのための準備をした。1926年春の卒業の時、私は自発的に、メレル先生のお手伝いをすることに決め、先生がアメリカから帰って来られるのをお待ちしておった。先生や近江ミッションの人たちと一緒に軽井沢で夏を過ごし、3ヵ月間近江^{おうみ}で働いた後、私は徴兵^{ちようへい}によって10ヵ月の間兵役に服した。私が軍隊にいる間に、家の事情が大きく変わり、私が家族の者^{やしな}たちを養^{やしな}っていかねばならなくなった。俸給^{ほうきゅう}を得るために働かねばならなくなったのだ。そこで私は近江^{おうみ}に行き、兵役後の私の近江ミッション^{おうみ}での仕事について、メレル先生に御相談^ごした。そしてその時、私はメレル先生が私に、儀式的に洗礼を受けることを期待しておられる、ということを知った。私は、人が洗礼を受けることを批判はしない。しかし私にとって、洗礼を受けるということは、十字架上で私の救いのために死なれたキリストへの、純真^{じゆんしん}さ、純潔^{じゆんけつ}さを失うことであった。

私たちは二人共、残念だがお互いに別々に仕事をしたほうが良い、と考えた。私は自分の行動が正しかったのか、まちがっていたのかはわからないが、しかし、お互いにそれぞれの良心に従って行動したのである。このことは、私たちの友情を深め、私は以前と同じように、先生が東京へおいでになるたびにお会いした。そして私は、東京大学の理学部に職を見つけた。

1932年に退職し、田舎への福音^{ふくいん}伝道^{でんどう}を始める準備をして、次の年の終わりに現在の場所（山形県の小国^{おぐに}地方）へ引っ越した。そこは私が数年来、夏休みの間に訪れて

いたところである。

メル先生は偉大な教育者で、吉田さん⁽⁷⁹⁾や村田さん⁽⁸⁰⁾などの人々を立派なクリスチャンの紳士に教育なさった。そこで私は、福音伝道の中心は学校であるべきだと思ったわけだ。先生に、その新しい計画をお話しすると、とても喜ばれ、先生の愛読書であるデビッド・グレイソン⁽⁸¹⁾（レイ・スタンナード・ベーカー）の「満足物語」⁽⁸²⁾を貸して下さった。この本は、都会で金儲けに失敗した人が、田舎の生活によって満足を得ているという話で、私はこれを大変気に入って、毎年この本の中の四つの章をテキストとして私の学校で教えている。先生に小国地方の地図をお見せすると、その輪郭が近江の国のそれに似ているからとおっしゃり、そこを「小さな近江」と呼ばれた。

1934年の4月29日から5月1日まで、まだ私の妻と子が東京から来る前であったが、メル先生は、その私たちの所を訪ねて下さった。その時の報告文である「本当の福音伝道」という文は「近江のからし種」⁽⁸³⁾という英文雑誌の1934年の6、7月号に載っている。先生はその時、駅から7マイル⁽⁸⁴⁾以上も深い雪の中を歩かねばならなかったし、5月1日には大雪が降ったので驚かれた。お帰りになる時には、「雪に閉じこめられた5月1日」という詩⁽⁸⁵⁾を書いた一枚の紙と、キリスト教的な隣人愛の良い印象を人々に残して帰られた。

雪が解けると、私の妻と子が東京からやってきた。小さな水力発電機も完成し、9月には村の人たちと数名の東京の友人たちを招いて基督教独立学校の献堂⁽⁸⁶⁾礼拝を行った。しかし生徒はひとりも来なかった。私たちは、生徒たちが学費を得ることができるように仕事場を作ってやらねばならなかった。その頃、山奥の村には、義務教育後も学校へ行こうとする者はだれもいなかったのだ。私たちの学校は、わずかな雇い人たちに英語と聖書を教えることから始まった。

私が仕事場に適する仕事を見つけようと一生懸命になっている時、日中戦争が起こり、1937年、私は技術将校⁽⁸⁷⁾として召集された。1943年、太平洋戦争の最中に復員⁽⁸⁸⁾したが次の年に逮捕され、1945年の2月までの8ヵ月間、監房に監禁された。キリスト教徒であり、平和主義者だという理由からである。釈放された後、3月に、私は東京の友人たちや親戚たちを訪ね、軽井沢⁽⁸⁹⁾にメル先生をお訪ねした。先生は、最愛の二つの国の間の戦争に、心臓を痛めておられた。ついに戦争が終わり、新しい時代が始まった。私の若き友人はほとんどみな、戦争でなくなった。私は福音伝道の仕事を新たに始めなければならなかった。日本は、戦争で死んだ人々の貴重な犠牲によって、平和国家として生まれ変わった。

新しい高等学校制度が制定され、中学校が義務教育となった。そこで私たちの基督教独立学校は、高等学校として新しく出発した。山奥の村人たちも、教育の重要性を認めるようになった。認可を得て、15人の一年生と全部クリスチャンの職員たちと

共に、1948年5月から始めたわけだ。

神のみに寄り頼み、この世のものから独立して、神のお護り^{まも}のもとに17年が過ぎた。これがキリスト教的な独立である。メレル先生がすべてを捨てたように、我々もすべてを捨ててイエスに従った。現在は、3クラス、85名の生徒と14人のクリスチャンの先生、職員がおり、196名の男女が卒業していった。私たちは、キリスト教の真理を教えた。その真理は、彼らのうちのいく人かを変えた、また他の者たちをも変えていくと思う。私たちは生徒数を各クラス25名、全校で75名にし、それ以上にならないよう努^{つと}めていくつもりでいる。

私たちは、キリスト教の真理により教育しているので、どんな干渉にも妨げられない。現代の日本の高等学校は、大学入試の準備^{ゆが}によって歪められているが、私たちは受験準備はしない。この学園の卒業生の3分の1以上は大学へ行く。私たちの教育を理解し、彼らを喜んで迎えてくれる大学へ入るのである。日本ではキリスト教の信仰が無視されているので、本当の道德教育ができない。でも私たちはそれを行うことができる。この小さな努力が神と人々とにお役に立つようにと願っているのである。

(英文雑誌"The Omi Mustard Seed"に1965年発表したもの・小関妙子^{こせき}(⁹⁰)訳)⁽⁹¹⁾

6-8 南原先生を懐う

南原先生の御生涯を懐うときに第一に思い浮かぶのは吉田茂元総理大臣⁽⁹²⁾が先生のことを「曲学阿世⁽⁹³⁾の徒」と呼んだことである。日本中の学者の多くが学問を金儲けの為に用いている。吉田茂には学問のことはわからない。自分の周囲の学者が金儲けの為に学問を曲げて、吉田茂におもねっている⁽⁹⁴⁾ので、その曲げられた学問がほんとの学問だと思い込み、全面講和⁽⁹⁵⁾を主張する先生の論説を世間の人気を博する為に学問を曲げたものと考えたのであろう。自分に反対するものを何でも間違っていると考える人が政治家には多い。「不思議の国のアリス」⁽⁹⁶⁾に猫が言った面白い言葉がある。「猫は狂ってる。犬が狂ってないなら、犬と反対のことをする猫は狂ってる。犬は嬉しいと尻尾を振り怒るとなるが、猫は嬉しいとうなり、怒ると尻尾を振るからだ」⁽⁹⁷⁾というのである。南原先生は他の学者と異なったことをなされたから曲学阿世と吉田茂に言われたのである。多くの学者が金儲けの為に学問をするのに、先生は学問を愛し、真理を愛して学問をなされた。そして、先生にほんとの学問をさせたのは内村鑑三先生を通して学ばれたキリスト教の信仰である。

先生が常に読んで信仰を養って居られた聖書の中のイザヤ書（2章6節、7節、8節）に次の言葉がある。

あなたはあなたの民ヤコブの家を捨てられた。これは彼らが東の国からの占い師を以て満ちし、ペリシテ人のように占い者となり、外国人と同盟を結んだからである。彼らの国には金銀が満ち、その財宝は限りない。また彼らの国には馬が満ち、その戦車も限りない。また彼らの国には偶像が満ち、彼らはその手のわざを拝み、その指で作ったものを拝む。

予言者イザヤが預言者として活動を始めたのは紀元前740年頃、ウジヤ王の死んだ年である。ウジヤ王の時に、ユダ王国は非常に発展した。ダビデ大王の時には及ばないが、領土も拡張され、紅海⁽⁹⁸⁾にも港を持つようになり、非常に経済的に発展した。これをイザヤは神の刑罰だと言っているのである。神が、神の民、ユダ国を捨てられたからユダは経済成長をしたのだと言っている。内村先生はウジヤ王を明治天皇にたとえられた。共にその治世に非常に国が発展したのである。そしてユダは約150年後にバビロンに亡ぼされ、日本は日露戦争の大勝利後たった40年で滅亡に瀕した。まことに経済成長は神の刑罰である。

そしてイザヤはその経済成長は学者が学問を曲げて、学問を金儲けの為に用いたからであると言っている。東の国からの占い師というのは占星術者のことである。

Astrology とはその文字の示す如く、立派な天文学である。それを金儲けに悪用したから占星術に墮落したのである。だから今日、日本で学問を金儲けに用いて、経済成長したのと同じことを警告しているのである。日本でも有機水銀が猫を水俣病にすることが実験で確かめられても、それを秘して経済成長をさせて来た。同じように学問を曲げて金儲けをたくさんして経済成長をなしとげたのである。

外国人と同盟を結んだというのも金儲けの為である。それで経済成長をしたのである。日本がアメリカと単独講和⁽⁹⁹⁾をしたのも、安保条約⁽¹⁰⁰⁾で同盟したのも金儲けのためである。南原先生が単独講和を排撃されたのと同じ精神をイザヤが述べている。

その結果、彼らの国に金銀が満ち、その財宝は限りなくなつた。石油ショック⁽¹⁰¹⁾で少し減つたが、外貨⁽¹⁰²⁾が溜まりすぎて困つた日本と同じである。経済成長をして生産が増大するとそれを消費して貰わなければならない。浪費を要求するようになる。いくら贅沢をしても消費が追いつけない。それで最大の浪費である軍備を増強するということになる。彼らの国には馬が満ち、その戦車も限りないというようになる。戦争をしないつもりでも軍備をすれば結局戦争するようになり、勝つても負けても苦しむようになる。2,700年前と同じことを今日でも繰り返している。

「また彼らの国には偶像が満ち、彼らはその手のわざを拝み」とある。経済成長すれば偶像崇拜がさかんになるのである。今日の人は木や石で作つた偶像は拝まないが、金銭という偶像を拝んでいる。これも手のわざである。金銭さえあれば幸福になれると思つて、金儲けに憂き身をやつして⁽¹⁰³⁾いる。金を儲けても幸福になれないで、まだ足りない、まだ足りないとあくせくしている。偶像崇拜は最も低級な御利益宗教であるが、金銭万能主義はこれと全く同じである。現代の知識人は宗教をバカにして、宗教のことを考えないので、宗教については文明以前の人⁽¹⁰⁴⁾の程度の信仰しか持っていない。

2,700年前にこのように現代にもあてはまる経済的洞察を述べた預言者イザヤは偉大ではないか。このような言葉のある聖書は偉いものである。南原先生が終生聖書を手放されなかつたのも当然である。内村先生からほんとのキリスト教を学ばれたから、吉田茂から曲学阿世と罵られたほんとの学問をなさつたのである。

なお一つ南原先生について述べなければならないことがある。アメリカの占領下にあつて先生はマッカーサー⁽¹⁰⁵⁾の所に御機嫌うかがいに一度も行かなかつた。占領下になって、多くの日本人は関係のある米国軍人軍属⁽¹⁰⁶⁾に取り入つて利益を得ようとして狂奔⁽¹⁰⁷⁾した。しかし、南原先生は所謂マッカーサー詣でをしなかつた。それでも教育使節⁽¹⁰⁸⁾としてアメリカに行く時には礼儀上挨拶に行かれた。その時にマッカーサーが「あなたは事毎に私の占領政策に反対して来た。しかしそれでよいからアメリカへ行つたら思うことを遠慮なく述べて来て下さい。」と言つたとのことである。さすがにマッカーサーも偉い。自分に反対する人でも正しい人は尊敬する。そればかり

でなく、実は利益の為に自分に^{へつら} 諂う人々に^あ 飽きあきして居^おったのであろう。

南原^{なんばら}先生はマッカーサーに従い国家権力に従うよりは、真理に従ったのである。それ程^{ほど}真理を愛して居^おられたのである。学問とはよく物事を見て、よく考えて、真理を探究することである。そして得た真理が真理であることを実証する。こうして得られた真理の体系が学問である。そして、人間は真理に従って生きなければならない。人を真理に従って生きて行くようにさせるのが学問である。それだから学問が^{とうと} 貴いのである。学問が社会を導くべきであるのに、今日は学問が社会に引きずられてしまっている。学問が曲げられて、悪用されて、金儲^{かねもう}けに使われている。このような時に南原先生を失ったことは日本の国にとっても、日本の学問にとっても大きな損失である。先生が存在してい^{きよ}らっしゃるだけでも日本の学問を潔める力があると思う。

昨年三月末に御病^{ごびょうしょう}床の先生をお訪ねした。ベッドの上に起き上がられて、しばらくお話出来た。二ヵ月足らずのうちに召^めされるとは露^{つゆ}知らず、先生に「是非^{ぜひ}御^おからだを大切になさって、少しでも長くこの世^{とど}に留^{とど}まられ、日本の学問を^{まも}護^{まも}って下さい。」と御願^おいしてお別れした。

(「聖書の日本」第 463 号、1975 年 2 月)

6-9 南原先生と独立学園

南原先生は私を内村先生門下の信仰の後輩として、また同じ大学での後輩として、専門は違うが、常に何かと心にかけて下さった。

私が1932年6月に理学部物理学教室の助手を辞めて、山形県の山の中の小国郷の、そのまた山の中の津川村叶水に移ってからはお会いする機会が少なくなった。小国郷は1924年以来内村先生の若き頃の夢の実現として毎夏行われて居った小国伝道の地である。内村先生が1930年に召されてから、私はどこでどのような伝道をしようかと考えて、小国に学校を立てて教育を通して伝道することにしたのである。信仰の母体が教会や寺院であると、形式主義、儀式主義に流れ易いので学校を信仰の母体とすることは意義のある、新しい試みと考えたからである。キリスト教は真理である。真理なる学問を教える教育を行う学校で真理なるキリスト教を教えることは最も相応しいことである。

1932年の12月末から二週間にわたって初めて雪に埋もれた冬の小国に行って、雪の中の生活が意外に明るいものであることを知って決心を強めた。当時の山村の人々は義務教育を終えてからなお学校へ行くなどは考えていなかったもので、半日働いて半日勉強するというようにし、雇った青年に教えることにして1934年9月に基督教独立学校として出発した。いろいろな仕事を考えて、ようやく軌道に乗りかけた時に日中戦争⁽¹⁰⁹⁾が始まって私が召集されたため中断された。召集解除になって帰ると、今度は平和主義と信仰の故に特高に8ヵ月拘留された。釈放されてから南原先生をお訪ねした時に、よく信仰の為に戦ってくれたと喜んで下さった。

敗戦後南原先生が東大総長になられたことは大変意義あることであった。日本の教育の建て直しばかりでなく、日本の国家の復興にも大いなる力になった。新しい教育制度が行われるようになったので、新制の高等学校⁽¹¹⁰⁾として再出発することにして、1948年4月基督教独立学園高等学校が新制高等学校の発足と同時に出来たのである。

南原先生は総長になられてからは、他の仕事は一切なさらないで、大学の仕事に専念された。卒業式等でなされた先生の演説が敗戦後の日本の進むべき道を示す格調高いものであったので、方々から講演を依頼されたが断って居られた。総長退任後は断って居られた責を果たす為に方々に講演に出向かれた。山形県でもお願いして、1954年秋に山形県下の主要な所で講演をして下さることになった。その時に先生は独立学園にも案内してくれるならという条件をつけられた。基督教独立学園高等学校は創立後6年で、全生徒がようやく30名になった時で、山形県下でもほとんど知られていなかったもので、招へいの係の県の学務課でも驚いたらしいが、とにかく先生の要請なので、山形市、庄内地方⁽¹¹¹⁾を先にして、米沢地方⁽¹¹²⁾を後にして、最後に独立

学園にお寄りいただくという日程を作った。これも後輩の仕事を手助けするという深い思いやりからであったのだと思う。私立学校は文書課の所轄であったので学務課ではよく知らなかったのであった。東京からは先生の大学での教え子の郵政省⁽¹¹³⁾の山本課長がずっと同行された。

私も米沢の御講演の時から先生の御伴をした。翌日の長井町⁽¹¹⁴⁾での講演を終えて、いよいよ小国に向かった。当時の独立学園はお客様をお泊めするような部屋がなかったので、小国郷の中心の町に泊まるように県で手配して下さった。町で一番古い宿屋に泊まっていたようにお願いした。その宿屋は小国伝道の始めから、夏休み毎に伝道に来た時に泊まった所である。夕食後小国の町内の信仰の友人達が十数名集って、先生からいろいろお話を伺った。

翌日は附近の紅葉の名所を見ていただくこうとしたが、独立学園が目的だからとおっしゃるのですぐに学園に向かった。当時は道路も悪かったので車で二時間近くもかかって溪流に沿うてさかのぼって、ようやく学園に着かれた。学園の附近は丁度紅葉の盛りであったので、わざわざ紅葉の名所に御案内しなくとも先生は大変喜ばれた。

学園の授業をも見ていただくために、校長の私が受け持っている全学年合同の国語の授業を行った。これは内村先生の文章を黒板に書いて書き写させて、説明を加えるのであるが、その日は書写は省いてプリントにして配って、説明するだけにした。丁度「古今集⁽¹¹⁵⁾ 擅⁽¹¹⁶⁾ 評」という文章⁽¹¹⁷⁾の中の在原業平⁽¹¹⁸⁾の歌

ちはやぶる神代もきかず立田川 からくれないに水染るとは

の批評の所である。「是れ古今集中最大の作なりと信ず、造化⁽¹¹⁹⁾を奇蹟視するの観、詩想⁽¹²⁰⁾の絶頂と云ふべし。紅葉散りて立田川を真紅色に括染る⁽¹²¹⁾ 処、是れ神の代⁽¹²²⁾にも聞かざるの奇観なりと云ふにあり。」をもって始まる内村先生特有の名文で、私の講義も自然と熱が加わった。「世に俗人⁽¹²³⁾あり、事物の価値を定むるに必ず貨幣の数を以てす。また近頃は新神学者なるものありて、古を計るに総て今を以てし、今は万物皆悉く単調一様なれば、古代に異様⁽¹²⁴⁾卓絶⁽¹²⁵⁾の現象ありしことなしとせり。然るに⁽¹²⁶⁾業平の詩人眼は云々」という調子である。恋歌ばかり作っていたと思っていた業平の歌の中にこんなに雄大なものがあることは驚異である。

その後で先生は生徒一同に講演をして下さった。まず学園に三つの日本一がある。第一は自然の環境がすばらしく、かつ校舎がみすばらしいこと、第二は職員達が良いこと、第三は生徒の瞳が澄んでいることであるとおっしゃってくださった。新聞記者は来ていなかったが学務課の方から聞いたのか、先生が日本一の高等学校とおっしゃったと新聞に出て、それが誇張されて、悪い点はなくあらゆる点で日本一だということになってしまって、何かというと南原先生が日本一の高等学校だとお

しゃつたと書かれて、先生には迷惑をおかけして申し訳ないと思っている。

御講演の趣旨は「人が全世界を儲けても、自分の命を損したら、何の得があろうか」というキリストの言の偉大さに打たれて信仰を持つようになられたというのであった。まことにこの言葉程人間の尊厳を強く言い表したものはない。「人間は誰でも人間である以上はこの価値を持っている。つまらないと見えるその一人を救う為に神の子が犠牲になっても惜しくない程のものを誰でも持っているのである。一同深い感銘を受けた。

お昼は一同で会食した。山の中の一番の御馳走はお餅であるので、つきたての小豆餅、雑煮餅、納豆餅を差し上げた。先生は都会の上等のお料理より喜んで召し上がった。楽しい会食のひとつときであった。

会食がすんでから村立の叶水小中学校へ行ってお話して下さった。総理大臣よりも偉かった前東京大学総長がこんな山奥の村においでになったので、生徒児童の他に村の人々が多勢集まった。お話の後で村人達と懇談会を持つ予定であったが、余り多勢で懇談など出来そうもないので中止した。先生が山形県を離れるまでお見送りしたかったが、その晩の宿泊は県の御厄介になることになるので、惜しかったが学園を御出発なさる時点でお別れした。

その後は出京⁽¹²⁷⁾した時に時折お訪ねさせていただいて、励まされ、力づけられて来た。最後にお会いしたのは召される二ヵ月足らず前、落合⁽¹²⁸⁾のお宅にお見舞いに伺った時であった。告别式が学園の創立記念日の前日であって出られないので22日の出棺式に参加させていただくことにして、最後のお別れに先生のお顔の周りをお花で埋めることにも加わらせていただき、火葬場までお伴をさせていただき、御国にての再会の希望を胸に抱きつつ地上での最後のお別れをさせていただいた。

(「回想の南原繁」、1975年)

6-10 内村鑑三と奥山吉治⁽¹²⁹⁾

1976年5月30日、奥山吉治記念会（東根厚生会館）においてのべたもの

内村先生の信仰はキリスト教の真髓^{しんずい}であります。本当のキリスト教の信仰というのは内村先生の信仰であります。そのところがわかる言葉はヨハネ福音書^{ふくいん} 4章 24節です。「神は霊であるから礼拝をする者も、霊とまこととをもって礼拝すべきである。」

ほとんどすべての宗教には形式とか儀式とかがつきまとして居りますけれども、本当は霊とまこととをもって礼拝すべきものです。そしてそれはどういう内容のものかと言いますと、ロマ書 3章 28節、「わたしたちはこう思う。人が義^ぎとされるのは律法の行いによるものではなく、信仰によるのである。」

これがキリスト教の真髓^{しんずい}であります。また今のところのすこし前の 3章 22節に、「それはイエス・キリストを信じる信仰による神の義^ぎであって、すべて信じる人に与えられるものである。そこにはなんらの差別もない。」とあるように、人はキリストを信ずる信仰によって救われるのであって、それ以外には救いの道は何もない。人間は皆平等であり、誰でも出来ること以外のことでは救われないから、何の差別もない。本当の意味の平等であります。霊的な意味の平等であります。キリスト教には偉い人も偉くない人もない。皆キリストの十字架によって救われる。その外のことは何の役にも立たない。ですから、キリスト教というものは本当の平等主義であります。いろんな儀式などでなく、キリストの十字架の犠牲^{ぎせい}によって救われるというものであります。ただ神の愛によって救われるというのではなくて、神の義^ぎが全^{まっとう}うされて、キリストを罰して犠牲^{ぎせい}にして、その贖^{あがな}いによって救われるというのがキリスト教であります。キリスト教と真宗^{しんしゅう}⁽¹³⁰⁾とはよく似ているようですが異なっています。真宗^{しんしゅう}の教えは、阿弥陀様の慈悲によって救われるというのでありますが、義^ぎを伴^{ともな}わない愛は愛ではない。ただ慈悲によって救われるというのは救いではないのであります。どうしても義^ぎを全^{まっとう}うして救うのでなければ本当の救いではないのであります。神様はただ人を救われなくて、神の子キリストを十字架にかけて、その犠牲^{ぎせい}の死によって人を救う道を開かれたのであります。そのことが人間の生きる道でありまして、それによって神の大きな愛の中にいることがわかりまして、そのことのわかった人がその大きな愛の千分の一でも万分の一でも行いたくなるのです。神の愛に感動して神の愛を行いたくなるのが信仰の果実でございます。ただ教えをならべて教えるだけでなく、その教えを実行出来るような力を与えてくれるのが真の信仰であります。神の愛を知りましてその万分の一でも人に分けてやりたいと思う心が、元来^{がんらい}愛のない人間に愛を行わせるようになるのであります。それですから教えではなくて教えを行うところの力を与えてくれるものであります。そのことが世界に道徳が行われ、愛が行われるよ

うにしてくれるのです。道徳を守って救われるのではなくて、救われて道徳が行えるようになるのであります。

キリスト教が始まった当時はローマ帝国が盛んな時代でありました。ローマ帝国というのは非常にかしこい国家でありまして、色々な宗教を保護いたしまして異民族統治に利用いたしました。けれども、キリスト教だけは迫害はくがいしました。キリスト教をつぶそうとしたけれども、どうしてもつぶれなかった。無抵抗です。愛をもって生き、自分を迫害する者のために祈るといのであるから、捕えて迫害はくがいすることは出来てもキリスト教をつぶしてしまうことは出来なかった。それで300年たちまして、ローマ帝国の方が降参し、キリスト教を認めるようになりました。ところが、それを保護するようになりましてかえってキリスト教が墮落だらくいたしまして形式主義に陥り、中世の暗黒時代となったのであります。それをルターが宗教改革を行いまして、もとの状態にもどしましたので、自由と真理の尊とうとばれる時代が出来たのであります。しかし、ルターも完全に形式的なものを捨て切ることができなくて、教会制度と、洗礼と聖餐式せいさんを残してしまった。ひとたび失われたのがルターの宗教改革によってもとの姿をとりもどし、自由に大きな力をもつ近代文化を作ったのですけれども、その僅わずかな形式的部分を残したためキリスト教というものが弱くなって、今日戦争を止めさせることも出来ないし、唯物論的経済学に負けそうになるという状態になったのであります。そして、キリスト教では世は救えないというふうに皆が考えはじめております。そういう時に内村先生は本当の、正しい、もとのままのキリスト教の姿にもどされたわけでありまして。そして、人が救われるのはただ信仰によるだけだ、キリストの十字架の贖あがないを信じる信仰によるだけだ、外ほかのものは一切いらぬ、ということを明らかにされたのであります。それで、この世界というものは、内村先生のような信仰によらなければ、どうしても救われず亡びる外ほかに仕様がしようないものである。そして今日はその信仰から外れた困難な時代になり、激動の世の中と言われるようになりました。激動の世の中だから信仰等かまっていられないという人があるでしょうが、実は本当の信仰からはなれてしまったからこういう状態になって来ているのでありますから、今日程キリスト教の信仰に帰らなければならないことを示す時はありません。内村先生の信仰はキリスト教の真髓しんずいであります。それによらなければこの世界は滅亡あるのみです。

奥山翁おう⁽¹³¹⁾と内村先生とが、信仰による本当にうるわしい交わりを32年間続けて来られたわけでありましてけれども、その交わりの基礎であるところの信仰というものは、今言ったような信仰であります。本当に人間の救われるのはキリストの十字架の贖あがないによるんだ、その外ほかには何もいらぬ。外ほかのものは何の役にもたたない。だから本当に平等であります。ですから先生の方が偉ほうくて弟子の方が偉ほうくないということはない。教師たる者が、自分は偉だらくいと思ったら墮落する心配がありますので聖書には「先

生」と呼ばれるな、と書いてある。先生も弟子もキリストの前には皆同じである。そしてキリストの十字架によって救われるのであります。こういう信仰が奥山翁と内村先生を結びつけたのであります。それ故奥山翁は内村先生をあまり先生として奉らない⁽¹³²⁾。この度出ました奥山翁の本を読んでも内村先生を友人の様にあつたっているのではないか、と思われる方もあるかも知れませんが、それは奥山翁が本当の信仰をつかんだからであって、人は誰でも神様によってのみ救われ、生涯を全うすることができるのだ。先生もいない、牧師もいない、法王とか監督とか僧職もいない。誰でも神様にすがって、神様に導かれて立派な信仰を全うすることが出来る。それが内村先生がとかれたキリスト教から当然出て来るのであります。奥山翁はそれを徹底させて、そしてそういう信仰をもって内村先生と交わられたわけでありました。神様にすぎるから先生なんかいないんだ、そんな態度で先生と冷やかな交わりをするというように見えますけれど、そうではありません。誰でも神様に頼って立派な信仰をもつことができるという大きな真理を教えて下さった方に対して、愛と尊敬との心が湧かないわけではないのであります。で、奥山翁もそのために内村先生に対しては並々でない愛と尊敬をもっておられたのであります。毎年リングを30年送り届けたというそのことは、内村先生に対する愛のあらわれであります。奥山翁がリング栽培をはじめられ、それを最後まで続けられたことは勿論農村振興を考えられたためでもありましたけれど、それだけでは必ずしもうまく成功はしていなかったかもしれない。しかしそれにもかかわらず続けられたのは、内村先生に上等なリングを送りたいという心から続けられたのだと思います。そのリング園の名前が「生香園」という名前であり、本当なら清い香りとも書くべきところでもありますのに「生」という字を用いて生香園という名前をつけたのです。これは勿論内村先生の書かれた「生香園」という額のコリント後書2章15節、16節と書き入れてあるところを読まないとうからない名前であります。

「わたしたちは、救われる者にとっても滅びる者にとっても、神に対するキリストのかおりである。後者にとっては、死から死に至らせるかおりであり、前者にとっては、いのちからいのちに至らせるかおりである。」と、ここで言っているのであります。信仰をもった人は、私たち救われる者には生にいたるかおりであり、信仰をもたない亡びる者にとっては死にいたるかおりである、と書いているのであります。その意味で「生のかおり」と内村先生は名をつけられたわけです。ですから、

この年も 恵の露にうるおいて 生の香り嗅ぐぞうれしき

という内村先生の歌にもございますが、その香りはただのリングのにおいだけじゃなく生の香りがはいつている。ここでかおりというのは信仰をもって生きている人を言

うのであって、私たちは生せいのかおりを出している。このリングには奥山吉治きちじという人の信仰によるリング作りの生涯しょうがいがあらわれている。そしてその素晴らしい信仰を教
えて下さった内村先生に対するその愛が香りとなってにじみ出ている。その信仰の
おににいたらせるかおりである。私たちには生せいから生せいにいたるかおりである、こう
いうことから生香園せいこうえんという名前をつけたわけでありませう。そのように本当の信仰をも
って、内村先生を人物崇拜すうはいするといふのじゃなくして、信仰の根本において内村先生を
愛し尊敬し交わりを続けたのであります。農村の経済のためといふだけなら途中で止
めたかも知れない。けれどもそうじゃなく信仰から、ほとぼしり出る自然の事として
続けて来たわけでありませう。本当に奥山翁おうは内村先生から教えられた通りの、そのま
まの信仰をもって生きて来られたのであります。内村先生も非常な苦難を通してあの
偉大な信仰をもたれたのでありますけれども、奥山翁おうも非常な苦難しょうがいの生涯しょうがいを通して
信仰きたを鍛えられ、そして、立派な生涯しょうがいを全うされたわけでありませう。

山形県には内村先生と信仰の根本において交わられた、もう一人の人が居ります。
鶴岡市つるおかに居られた諏訪熊太郎すわくまたらうという方でありませう。さき程、佐藤さんが読んでくだ
さった中に内村先生が鶴岡つるおかに講演に来られたついでに、山形の藤井先生の官舎かんしゃ⁽¹³³⁾に
一泊され、その時に奥山翁おうも会われたといふことでありませうけれども、それは鶴岡
の諏訪熊太郎すわくまたらうという方のところへ講演に来られ、その時の帰りのことでありませう。諏
訪熊太郎すわくまたらうさんも非常に苦難しょうがいの生涯しょうがいを経まして、その結果非常に深刻な信仰をもたれ
ました。丁度奥山翁おうと同じく結婚問題で非常に苦しまれたのであります。奥山翁おうの話
は先程うかがいましたが、諏訪熊太郎すわくまたらうさんの苦難はといひますと奥さんが精神病にな
られたことで、そのために非常な苦勞をなされたのであります。奥山翁おうも結婚の破局
のために、非常な苦しみをなされた。そしてそれによって深い信仰をもたれたといふ
点においては同じであります。山形県にこういう二人の方が出たといふことは、山形
県のため名誉なことだと思ひます。西に諏訪熊太郎すわくまたらうあり、東に奥山吉治きちじあり、といふ
ことは普通の人の考えから見れば何でもないことかも知れませうけれども、しかしそ
れは神の目から御覧になると非常に大きなこととござひます。一番さきに申しました
ように、この世界は本当の純粹のキリスト教によらなければ救われぬ、亡びるばか
りのものであります。その時に、その純粹の本当のキリスト教の信仰をもって生きぬ
かれたといふ人が山形県に二人も出たといふことは非常に偉いことであると思ひま
す。内村先生の形式によらない、実に信仰だけによって救われるといふその信仰が、
だんだんと世界から認められるようになると思ひます。それは形式的な信仰だめが駄目
になりまして、この様な困った状態になっていることを思ひて見てもわかるのであり
ませう。そのことを思ひます時に、本当に奥山翁おうが内村先生と、こういう交わりをして
おった、本当の信仰もとに基づく交わりをしておったといふことは大きなことであり、そ
してまた、山形県にとりましてはすばらしいことであり、本当に山形県が信仰的にみ

て偉いところであるということになると思うのであります。

もう一つ奥山翁^{おう}について申したいことは、この略歴を見てもわかりますように三年しか学校教育を受けなかったにもかかわらずあの様な高い教養をもたれたということです。学校を主とした教育が駄目^{だめ}になり大学を出たものが学力がないというような状態になっております時に、奥山翁^{おう}がただ尋常^{じんじょう}小学校⁽¹³⁴⁾教育を三年受ただけで、非常に高い教養をもたれた。この事は非常に偉いことであると思うのであります。

無教会の信仰というのは本当に偉いものであるかも知れないが偉い人だけが持つことの出来る信仰、学問のよく出来る人でなければもてないものだと思われる方が多いようです。ことに戦後、南原先生^{なんばら}、矢内原先生^{やないばら}と二代も続けて東大総長が無教会の中から出ましたので、無教会というものは東大総長になれるような人でなければわからないもののように考える人が多いのでありますけれども、そうじゃない。「救いには何の差別あるなし」というところをさきほどロマ書で読んだように、誰でも同じように神様にすがれば立派な信仰をもつことが出来るのです。奥山翁^{おう}は小学校三年だけであの高い教養をもたれた。信仰をもちますと真理を愛するようになり、本をよく読むようになるので、自然と高い教養をつむ。高い教養をもったから信仰をもったんじゃなくて、信仰をもったから本当の教養を身につけるようになる。私の村に、年よりで信仰をもった人があります。その方は尋常^{じんじょう}小学校四年の義務教育を受けただけですが、その後よく本を読まれたものですから、今では大学卒業者も比べものにならないような教養をもっておられる。奥山翁^{おう}はなおそれよりも一年少ない三年しか受けていないのに立派な教養をもって居られたということは、今日の日本の教育の間違っていることを事実をもってよく示す大きな存在であるのであります。決して無教会の信仰というものは特定の人だけが信ずるのではなく、どんな人でも、誰でも神様に頼るといって立派な信仰をもつことができるというものであります。

北海道の函館^{はこだて}の東^えに恵山^{えさん}という山がありますがその麓^{ふもと}に古武井^{こぶい}という小さな村がありましてそこに、平林徳蔵^{ひらばやしとくぞう}という床屋^{とこや}さんが居りました。その人も教育を受けない方でありましたが、それでも内村先生の発行する「聖書之研究^の」という雑誌を毎月読んでいただけで、立派な信仰をもたれ、一生を終えられた。1924年（大正13年）に亡くなられましたが、そのままで忘れられてしまうところを1925年（大正14年）に内村先生が函館^{はこだて}に参られまして、この話を聞かれました。なくなったとき、お葬式^{そうしき}を仏式にしようとお坊さんが主張しましたら、村の人たちは、平林徳蔵^{ひらばやしとくぞう}さんはキリスト信徒として村のために非常につくしてくれた方だから、当然キリスト教式をもって葬式^{そうしき}をすべきだ。もし和尚^{おしょう}さんがどうしても仏式にしないでならないというなら、和尚^{おしょう}さんこそこの村から去ってもらおう、と村の人たちが言い出した。それでやむを得ず函館^{はこだて}に行って牧師を頼んでキリスト教の葬式^{そうしき}をしたというのであります。その翌年、函館^{はこだて}に結婚式があったとき参りました内村先生は、結婚式に呼ばれた牧師

さんの一人からこの話を聞いて大変よろこばれた。本当に「聖書^の研究」という雑誌だけで、あとは神様に頼って、一人で村の中で信仰をもって生きた。そして村の人をしてあの人はキリスト信徒として村のためにつくして生きたんだから、キリスト教の葬式^{そうしき}にすべきだと、主張せしめたほどの生涯^{しょうがい}を送った方なのです。その方も義務教育しか受けていないんですけれども、やはり信仰をもちまして本を読まれ、立派な教養をもたれたらしい。私が一昨年^{はこだて}、函館でその孫に当たる人に会いましたら、本を沢山^{たくさん}もっておられたと言っておられました。

キリスト教というものは、決して学問の出来る人でなければわからないものじゃなく、誰でもわかるものである。そしてわかると本当の学問が出来るようになりますから、それで皆キリスト教を信ずる人が学問のある人のように見えて、学問がある人でなければ信仰を持たないというような感じを与えるわけであります。けれども、そうではなく誰でも本当に神様だけに頼って、立派な信仰をもつことが出来るのであります。そしてそのことを奥山翁^{おう しょうがい}の生涯^{しょうがい}が実証しているわけであります。

(「奥山^{きち じ}吉治記念会集録」、1976年)

6-11 諏訪熊太郎と内村先生

1975年8月、諏訪先生遺稿追想集の為に記す

諏訪先生は内村先生が身をもって教えた信仰をそのまま信じ通された。同じく苦難を通して益々その信仰を強められ、同じく悪魔に苦しめられて、一層キリストに依り継り、信仰により敵に打ち勝たれた。内村先生もこれを肌で感じられたのであろう、「諏訪熊太郎の信仰はほんものだ。」と仰ったことがある。内村先生の「日々の生涯」の1923年2月25日（日）の所に、この日の大手町衛生会館での講演について述べた後に次の事が書かれてある。

余をして福音宣伝の仕事に入らしむる第一の動機となりし『基督信徒のなぐさめ』初版発行第三十年記念日である。朝より夫婦相共に此事に就いて語り、今昔の感⁽¹³⁵⁾に堪えなかった。恰も好し⁽¹³⁶⁾、山形県鶴岡町諏訪熊太郎君より祝電を送って呉れた。曰く『コグンケントウ三〇ネン、ヒツケン（筆剣）イヨイヨスルドシ、カミニカンシヤシタテマツル、スハクマタロウ』と。中央講演会より疲れて家に帰って来て、此祝電に接して急に元気づき、久々振りにて漢詩を作て見ようと云う気分になった。然し韻と平仄⁽¹³⁷⁾も皆んな忘れて仕舞ったから、ホキットマン⁽¹³⁸⁾流に韻なし平仄なしの七言絶句⁽¹³⁹⁾をやって見た。

孤軍健闘三十年 回顧難禁感謝涙
 反对何恐悪魔輩 勇進高掲十字旗⁽¹⁴⁰⁾

（読み）こぐんけんとうさんじゅうねん かいこすればかんしゃのなみだきんじがたし

はんたいなんぞおそれんあくまのやから いさみすすまんだかくあげよじゅうじのはた
 これは詩でないという者があれば云うべしである。然し尠くとも思想丈けは詩であると思う。韻や平仄は中国人⁽¹⁴¹⁾が歌として唄う為に必要である。唯意味丈けを味う日本人にはそんなものはなくても宜しいと思う。何れにしろ此日は余の小なる一家に取っては特別感謝の日であった。思わず凱旋の声は我等の口より揚った。我等は別に祝賀会を開かなかつた。唯一人の諏訪君の祝電で充分である。天に在ては我が肉体の父と、カズ子⁽¹⁴²⁾とルツ子とが感謝の祈禱を捧げて居て呉れるだろう。

内村先生はその25日夜、諏訪先生宛に封書でお礼の返事を書いている。

拝啓、今日中央講演会から家に帰って来たらば君の祝電の届いて居るに会いました。一読して感謝に堪えませんでした。此祝意を表して呉れた者は天下

君一人であります。実に感謝です。依って君の一句を取り、左の無韻無声の漢詩一首を作りました。

こぐんけんとう 孤軍健闘三十年	かいこすればかんしゃのなみだをきんじがたし 回顧難禁感謝涙
はんたいやあくまのやからをなんぞおそれんや 反対何恐悪魔輩	いさみすすまんじゅうじのはたをたかくあげん 勇進高掲十字旗

引きつゞき小生の為に御祈りを願います。

一九三三年二月廿五日夜

内村鑑三

第一句は祝電のままである。これは内村先生の信仰の生涯を歌ったものであるが、また同時に諏訪先生の生涯の歌でもある。苦難の生涯でもあるが、恩恵溢るる生涯でもある。内村先生が御自分の生涯だけを歌うなら、健闘を奮闘として孤軍奮闘三十年としたであろう。他にも自分の如き生涯を送っている者がいることを胸にうかべつつ歌った証拠である。この祝電が諏訪先生からであることは一層内村先生を喜ばせたのである。「唯一人の諏訪君の祝電で充分である。」と言って居られる。御葬式に列席させて戴いて諏訪先生の御生涯もまたテモテ後書 4 章 7 節の「私は戦いを立派に戦いぬき、走るべき行程を走りつくし、信仰を守りとおした。」という言葉通りのものであることを思い感激を新たにした。式後故人を偲ぶ宴にもお招きを受けた。会場の正面にこの健闘三十年の詩を掛軸にしたものが掲げられてあったので、この詩を繰り返し繰り返し読みつつ御馳走になった。10 年以上前のことだったと思うが諏訪先生を鶴岡のお宅に訪問した時に、内村先生の大手町講演「三つの呻き」⁽¹⁴³⁾を聞いた時に受けた感動のことを伺った。40 年以上も前の感動を昨日の事のように話された。「信仰一人旅」⁽¹⁴⁴⁾の中でもその事を詳しく述べて居られる。諏訪先生が如何に純真な魂の持ち主であることを示すものである。内村先生から「ほんもの」だと言われる信仰を持った諏訪先生を出したことは山形県の大きな誇りであると思う。

6-12 菊竹種次さん⁽¹⁴⁵⁾を悼む

イエスにさわっていただくために、人々が幼な子らをみもとに連れてきた。ところが、弟子たちは彼らをたしなめた。それを見てイエスは憤り、彼らに言われた、「幼な子らをわたしの所に来るままにしておきなさい。止めてはならない。神の国はこのような者の国である。よく聞いておくがよい。だれでも幼な子のように神の国を受け入れる者でなければ、そこにはいることは決してできない。」そして彼らを抱き、手をその上において祝福された。(マルコ福音書 10 章 13 節～ 16 節)

菊竹さんは、つよく真実を求めた方です。したがって愛の人であります。多くの人を愛し、また多くの人に愛されました。しかも、菊竹さんは真実を求めてもそれをなかなか掴むことが出来なかったのです。普通の生き方に満足出来ないで、人一倍真実に生きようとなさいました。美術を愛し美術家になろうとしましたが、形式的な名声を大切に家族に反対され、中学校の美術の先生になられたのです。そして、その不満を紛らすために酒を多く飲むようになりました。先生を 12 年もしたのですが、それにも満足されず放浪の生活を始めたのです。九州の各地を遍歴し、その間に看板の仕事を手につけたのです。この特技を持つことによって生活が乱れても、人に迷惑をかけることなしに暮らすことが出来ました。しかし、そのために一層乱れる結果にもなりました。大連⁽¹⁴⁶⁾に移った頃は、生活の乱れが最もはげしかったようです。植民地であり、収入が多いので、少し働くだけで酒を飲んでいることが出来たからです。大連で今の奥様と結婚なさったのですが、奥様は菊竹さんの酒のために非常に苦労されました。

繰り返して申しますが、菊竹さんの生活が酒のために乱れたのは、菊竹さんが人一倍真実に生きようとしたからです。ごまかしの人生に耐えられなかったからです。普通社会の生活では、外面を飾ること、人前を飾ることに多く費やされています。が、菊竹さんはそうではなかったのです。このことは菊竹さんの仕事に対する熱情を見るとよくわかることです。金を儲けるための仕事ではなく、よい仕事をするのが人生だと考えておりました。それで小国に住むようになってからも人の寝しずまった静かな時に、心ゆくばかりの仕事をするという日がつづきました。

菊竹さんの生涯における最も大きな出来事は、大連で救世軍⁽¹⁴⁷⁾の将校渡辺林太郎先生⁽¹⁴⁸⁾と出会ったことです。救世軍は、社会の底辺にいる人々に、基督教の伝道をするには軍隊組織でなければよく出来ないといって、英国のウィリアム・ブース⁽¹⁴⁹⁾という人によって創められたものです。渡辺先生は菊竹さんを愛し、菊竹さんの

友となって下さいました。渡辺先生のキリストに在る真の愛が、少しずつ菊竹さん夫妻を動かして、キリスト教にこそ、真実があることを悟らせたのです。渡辺先生は真の愛の人でした。終戦で引き揚げの時に自分の食べるものを他人に与えるというようにしたので、栄養失調で亡くなりました。

菊竹さんは義弟の本間定夫⁽¹⁵⁰⁾さんとの縁で小国に住むようになりました。人生をごまかすことの出来ない性質とキリスト教の信仰とで看板塗装の仕事を儲けるためにでなく、よい仕事をする喜びと奉仕の精神とでなさいました。人々に信用され、沢山の仕事が与えられ、酒のために生活が乱れることがなかったので、物質的にも安定した生活を営むようになりました。これまで住んだ何処よりも長く定住し、多くの人々の世話をしやり、多くの方々に愛され、この地での成功者として人生を終えることができました。

同じ信仰によって立つものとして、基督教独立学園を愛し、学園のために沢山つくして下さいました。学園の生徒をも愛されて、病気等で町へ出なければならない時には、生徒は大変お世話になりました。ちょうど三年前に学園の卒業生で進んで辺地の先生になった静岡出身の西川たえ子先生が、叶水で雪の穴に落ちて死んだとき、検死火葬などのため、菊竹さんのお宅に私共は一日泊めていただきましたが、そのときに示された菊竹さんの愛は実に大きなものがありました。人の嫌がる死体を一日預かって西川先生とそのご家族に大きな愛を示されました。これは、菊竹さんが学園のためにおつくしになられたひとつの例であります。そして、それ以来、西川家と菊竹家とは霊的に深い交わりを続けております。実は今日午後静岡で、西川たえ子先生の満三年の記念会が行われることになり、私が出席することにしていましたが、行けなくなりこれを西川家にお知らせしたのです。それに対し西川家から次のお手紙をいただきましたので読んでみましょう。

「種次様のご召天を聞き、三年前お目にかかり、お話をしたときのことが昨日のように目の前に浮かんで来ます。懐しい皆様を新しく思い出します。たえ子を自らの娘のように一緒になってご家族が悼んで下さったことは、永遠に忘れられないことです。天の父なる神が種次様のご家族の魂に祝福をもって豊かに報いて下さるように祈ります。心ばかりのお花料をお送りしますからお受け下さい。たえ子とお会いしていただくことを思い心躍ります。」

と、そして短歌が添えてあります。

良きサマリヤびとの思い出深いいざさらば ところ世のくにはきみに報いん

菊竹さんが学園や信仰についておつくし下さったことは、これだけではありません。お宅を聖書集会の場として提供され、小国の町の教会を持たないキリスト信徒の中心となって下さいました。

この告別式は、総合センターで行いたいと思いましたが、死とか葬式とかを忌み嫌う一般の考えから、葬式には貸さないことを条令で定められているために使えず、このせまい所で行なうことになったのです。死体を汚れているという考えは正さなければなりません。

菊竹さんは大連で信仰に入ってから酒を止めたのですが十年位たってまた時々飲むようになりました。酒を嫌いになって居って、酔いのさめた後の気持ちの悪さをよく話してくれました。けれども一種の中毒症状でしょうか、ときどき飲まずにいられないような体の調子になるのです。殊に夜遅くまで仕事をして疲れたときに飲んだようです。信仰の友人である私は、一度も酒や煙草をやめなさいと申したことはありません。ご自分でも止めたいと思っているのですから他から言う必要はないのです。ただ止める力が与えられればよいのです。キリスト信徒が酒を飲まないのは戒律のためではなく、酒を飲む以上の喜びを与えられているから、必要なら止められるのです。酒のためにしくじる人が多いので、しくじる人に君は飲むな、私はしくじりをしないから飲むというのは残酷なことです。私も飲まないから君も飲むなというのです。愛のために飲まないのです。それですから何といたっても菊竹さんの信仰が、酒を飲む以上の喜びを菊竹さんに与えてくれなかったことは確かなのです。それ故に菊竹さんの信仰が完全でなかったといえます。それなら菊竹さんのような愛の人の、従って立派な信仰の方の信仰の、どういう点が不完全であったかということは、よく考えてみる必要があります。

それは菊竹さんの信仰が知的でありすぎることです。菊竹さんはあまり学問をしすぎました。キリスト教の信仰は単純なものです。すべての人は罪を犯しているから死ななければならない、死から救われなければ永遠に生きることが出来ないのです。死を恐れないで罪を恐れなければなりません。死体が汚れているのではなくて靈魂が汚れているのです。死体の悪い臭いは消すことが出来ますが、靈魂の汚れを清めることは不可能です。どんなに修業を積み、難行苦行をしても潔められません。最も進んだ仏教は、他力本願と申して、アミダ様の慈悲にすがって極楽往生を遂げるというのであります。日本から法然上人や親鸞上人のような偉い宗教家が出たということは日本の誇りです。しかしこれでは足りません。愛といっても慈悲といっても同じであります。真の愛には義が伴わなければなりません。親が子を甘やかすと子にとっては却って不幸であり、ほんとうの愛ではありません。神は人を甘やかすことによってお救いにならないで、正義を通されて救い給います。ご自分を犠牲にして人を救い給います。神の子キリストを人間として地上に生まれしめ給い、キリストを十字

架にかけて罰して、人の罪を赦し、清めるということをした。私達人間が罪を犯した故に受けるべき罰を、キリストが皆引き受け下さったので人間が罪から救われるのです。1900年前のキリストの十字架によってすべての人が罪から救われたのです。このことを「真」と思うのが信仰です。人が救われるのにお祭りも、儀式も、難行苦行もいらない、ただキリストが十字架にかかって死んで下さったお陰で救われたということが人間にとって最も喜ばしい音ずれです。これを福音といいます。信仰とはこれをほんとうだと思ふことです。信じない人が救われないというのは、神が救って下さるのにそれは嘘だろうと行って差し出された救いのおん手を払いのけて逃げ出すからです。キリスト教ほど単純な宗教はありません。人間の側の努力は何もいらない、ただ信ずればよいというのでは余り単純すぎる、あまり話しがうますぎるとして多くの人々が信仰から脱落いたしました。けれどもいくら修業しても努力しても駄目だとわかった人には、十字架の信仰ほど確かなものはないのです。

このやさしすぎるということ、単純すぎるということが躓きとなることがあるのです。単純すぎて物たりなさを感じるので。私はこんにちの学問は難しすぎると思います。不必要に難しくしてあります。難しくなければ学問でないように思うのです。難しくて教える学者にもわからないという滑稽なことさえ生じます。ほんとうの学問が大学にないから大学紛争が生じたのです。ほんとうの学問はやさしいものです。偉い学者ほどわかり易く教えてくれます。

信仰も学問も、幼子のように単純になり謙虚にならなければわからないものです。先ほど読んで戴いたキリストの御言葉は非常に大きなことを教えている言なのです。人間にとって最も大切なことは己が罪を悟り、へりくだった心、謙虚な心を持つことです。菊竹さんはあまり学問をしすぎました。なかなかもの知りでありました。それで幼子のようにきれなかったのです。それでただ信仰だけで救われるということにある種の不安を感じました。頭では、単純な罪の赦しの十字架の福音でなければならぬことがわかっていても、心にももの足りなさを感じておりました。それが菊竹さんの信仰の弱点でした。酒に優る喜びが得られなかったのです。それが酒に勝つ力がなかった理由なのです。

菊竹さんが脳卒中⁽¹⁵¹⁾で倒れ、人生の最後に一年半の病床生活を持ったことは、実は神の大きな恩恵です。発作から回復された菊竹さんは幼子のようにになりました。奥様の姉妹が三人も小国におられ、家族身内の手厚い看護を大変喜ばれて、自分ほど幸福な者はないとたびたび言っていました。ときには夢でも見るのでしょう。変なことを言ったり我が儘を言ったり、駄々をこねて奥様を困らせるようなこともありました。私は却って喜びました。菊竹さんの唯一の欠点である学問に禍いされたことがとれてしまったことがわかるからです。しまいには言葉なども九州弁が沢山出てくるようになりました。長い病床生活にも拘わらず、病気の苦しみも余り感ぜず、

後になればなるほど楽になって、最後には安楽な大往生^{だいおうじょう と}を遂げられました。

この告別式には遠く九州、四国から古い友人、親族^{つど}が集って、近くにいる菊竹さんを愛し慕^{した}っている人々とともに菊竹さんを天国へ送ろうとしております。これは菊竹さんの大きな喜びであろうと察せられます。人間にとって死別は永久の別れではありません。私たちは皆やがて復活して永遠の生命が与えられ、別れた親しい者と再び会うことが出来るのです。一時の別れは悲しいものです。涙は目にたまりますが、涙の中にも再び会う希望をかたく持って、ある朗らかさをもって菊竹さんとこの世におけるお別れ^{いた}を致^{いた}しましょう。菊竹さんは神の最も喜び^{ほが}給う幼子^{たも おさなご}のような単純な信仰を持って、人生の勝利者として天国へ凱旋^{がいせん}せられました。

(1970年3月21日におこなわれた菊竹種次^{たねじ}告別式における式辞を本間利雄氏^{ほん まとし お}⁽¹⁵²⁾が要約したもの)

6-13 三百号に達する『聖書の言』^{げん}

私は 1924 年（大正 13 年）の初頭内村先生の門に入るとほとんど同時に石原兄と相識^しのようになりました。その後間もなく石原兄が校長をしておられた柏木日曜学校⁽¹⁵³⁾の手伝いをさせて戴^{いた}くようになりましてので一層親しく御指導願えるようになりまして。それ以来 37 年、信仰上の先輩として種々と導いて戴^{いた}きましたことを誠に有り難く存じます。

内村先生の晩年において石原兄は私達青年組と畔上⁽¹⁵⁴⁾、塚本⁽¹⁵⁵⁾両先生達の壮年組との中間の存在であられました。たいてい私達若い者の仲間になられてその餓鬼大将^{がき}になっておられました。ギリシャ語や古典の勉強の為に雑司ヶ谷⁽¹⁵⁶⁾のお宅や、その後間もなく移転された現在の荻窪⁽¹⁵⁷⁾のお宅へよくお邪魔致しました。内村先生から与えられる福音の真理に胸を躍らせつつ、共に若い日を過ごしましたことは終生忘れることのできない楽しい思い出であります。

日曜日には朝早く柏木に行き日曜学校のお手伝いをし、続いて午前の集會に出席し、それから石原兄等のいわゆる委員の方々と昼食を共にし、真理について語り合いつつ午後の青年のための集會の始まるのを待って、これに出席して帰るというふうには、ほとんど一日中共に暮らしました。また毎週火曜日の夕、塚本先生のお宅で行われたギリシャ語の会にも共に出席致しました。これがやがてギリシャ語の A 組に発展致しました。またその頃柏木青年会も結成され、月一回感話会が催されました。その他ダンテ研究会とかアウグスティヌス研究会も開かれましたが、皆石原兄が私達後輩を引っぱって下さいました。内村先生という信仰上の先生を与えられたと同時に、よい信仰の友人をたくさん与えられましたことは大いなる感謝であります。石原兄の内村先生へのお手伝いが一層忙しくなられたので、柏木日曜学校の校長の仕事が私が引き受けるようになりまして。

内村先生が亡くなられてから石原兄は荻窪のお宅を根拠となさって独立伝道を始められ、間もなく『聖書の言』を発売されるようになりまして。私は小国の山の中に入り遠く離れるようになりましてが、常に信仰上の兄としてご指導下さり、基督教独立学園創設についてはその役員になって下さり、地理的には離れても心では近しくして戴^{いた}いております。その『聖書の言』が 300 号に達するということを伺い感慨深いものがあります。

雑誌による伝道ということ、教会でなくして聖書雑誌を信仰の母体とするということは内村先生が創始された偉大なることでもあります。福音の真理が人間的な組織によらないで、それ自身の持つ真理性によって保たれて行くようにしたのであります。けれどもこれは内村先生という偉大なる天才によってのみ可能であり、先生が亡くなれ

ば多くの既成教会きせいに加えて「もう一つの」教会になってしまうであろう、という見方がかなり広く行われておりました。無教会が無教会という教会になってしまっは大変であります。内村先生しょうがいの生涯しょうがいをかけての戦いが無になってしまいます。内村先生が亡くなられて30年、まず教会にならないですみました。そして300号続いた『聖書の言げん』がこのために果たした役割は大きいと思います。内村先生の天才をまたずとも、聖書雑誌が信仰の母体となりうることを実証したのであります。これは実に偉大なることでもあります。平凡なる偉大であります。石原兄の偉さとか貴さとかは、この平凡さの中にあると思います。石原兄けいの名著『回心記かいしんき』をみてもこれには決して信仰的英雄はなばなの華々しさはありません。一つの平凡なる魂たましいの天路歷程てんろれきていであります。その故にこそこれが多くの人の魂たましいを打つのであります。パウロの偉さは第三の天に取り去られ、人の語るまじき言ことばを聞くというような特異な信仰体験によるのではなく、「ああ、我れ悩める人なるかな」⁽¹⁵⁸⁾と平凡なる私共と共に罪なげに嘆く所にあります。石原兄は、私達まねが真似しうる平凡な方であります。その石原兄が内村先生のなさったことを実行したのであります。内村先生の唱えられた真理となを確かめたのであります。創始された内村先生はもちろん偉大であります。しかし主しゅに頼れば誰でも、凡人ほんじんでも、これを実行することができることを実証したことは、また偉大なることでもあります。石原兄けいにこの偉大なることをなさしめ給うた神に感謝せざるをえません。『聖書の言げん』が300号続いたことは大いなる喜びであります。
 (「聖書の言げん」300号記念文集「福音ふくいんと生活」、1960年10月)

6-14 「聖書の日本」と小国伝道

小国伝道は1924年夏、政池兄と横山兄が内村先生によって派遣されて始められた。特に政池兄が小国本村（当時の行政区画による）の子供達を愛し、仲よくなり、帰京後も文通し、また来て下さいと言われて居ったので、廃絶しないで続いて派遣されるようになったのである。言わば政池兄の小国への愛によって続いて来たのである。

私が参加するようになったのは1928年政池兄と二人で派遣された時以来であり、1930年内村先生の召天後も継続された。内村先生の御考えで、二人ずつ行くようになって居ったが、政池兄が都合が悪くて行けない年もあったので、他の方にも参加して貰ったが、結局私が一番多く来たことになった。

内村先生没後如何なる伝道を為すかということが、私たちの最大の問題であったが、私は農村において教育を通して伝道しようと決意した。場所をどこにするかと考えた時に小国より他にないというのが自然の結論であった。しかし小国は政池兄の愛する伝道地である。これを横取りすることにならないかという心配が生ずる。伝道法が異なり、教育を通してするのであり、協同して伝道することは出来るのではないかと、よく話し合ってきたのである。私は小国に住み教育をもって伝道し、政池兄は外から「聖書の農村」をもって伝道することにした。しかし、私が小国に定住することになると、私が主導的になる恐れがある。これは結局政池兄が譲り難きを譲ったこととなる。基督教独立学校は1934年9月に献堂式をし、「聖書の農村」は10月に初号が発刊された。

時がたつに従って私が「聖書の農村」に書くことは少なくなり、政池兄が独立学校に来ることが少なくなって来た。「聖書の農村」は政池兄の個人伝道雑誌の形をとるようになり、1938年1月より「聖書の日本」と改めて、非常に優れた伝道雑誌となり、40年以上も続いて来て、今年8月には500号に達するという。何という喜ばしいことであろう。これは神が譲り難きを譲ったので、一層よい働きの方を与え給うたのである。政池兄の愛を嘉して⁽¹⁵⁹⁾、これを千倍し、万倍して報い給うたのである。必要なる力と智慧とを与え給い、護り、育て給うた。ヤハウエをほめたたえよである。

（「聖書の日本」第500号、1978年8月）

【 註・VI章 】

- (1) 人生読本は、かつて NHK で放送されていたラジオ番組の名称。読本とは、教科書や入門書のこと。
- (2) (1832 ~ 1903)、古河財閥を築いた実業家。足尾銅山を経営。
- (3) 正妻とは別の、妻のような女性。愛人。
- (4) 道すがら。
- (5) 癩菌によって起こる慢性の感染症。皮膚・末梢神経などに病変が現れるが、伝染力はきわめて弱く、現在は完治する。かつては遺伝性疾患と誤解され、患者は隔離され、断種や墮胎などの人権侵害が起きた。ハンセンとは、1873 年に癩菌を発見したノルウェーの医師の名。なお、原書の表現は、現在では適切でないため改めた。以下同様。
- (6) 原書の表現は、現在では適切でないため改めた。
- (7) 原書の表現は、文脈上適切でないため改めた。
- (8) 原書の表現は、現在では適切でないため改めた。
- (9) 原書の表現は、現在では適切でないため改めた。
- (10) 内村鑑三全集 15 巻 p.207 に収録。
- (11) コネチカット川。
- (12) Mt. Holyoke、ホリオーク山のことと思われる。
- (13) 大意は以下の通り。「秋が来る度に私は川を懐かしく思い出す。二つの大河を懐かしく思い出す。／その一つ目は、石狩川である。森は深く、水は静かで、弓形に伸びた鳶が深い淵を覆っている。赤い葉がその下に垂れていて、提灯が暗がりを探らしているように見える。水中には大きな魚が泳ぎ、水面には遠くの山々が映っている。私は何度となく一人で誰もいない川岸を歩き回り、時には美しい砂の上に立ち、時には葦の中に隠れて、私の靈魂の父と語らった。／その二つ目は、コネチカット川である。この川をホリオーク山の上から見ると、天上の銀河が地上に移されたかのようだ。私は、その岸で太古の鳥類の足跡を探し、時には楓の木の下に座り、時には松林の中に入り、異国にあって私の天の父と交わった。／静かなる秋と静かなる川！ 私はその岸に建てられた私の母校を忘れることもあるだろう。しかし、秋が来る度に私に静かな祈りの場を与えてくれた川を、私は死んでも忘れることができない。」
- (14) アメリカ合衆国マサチューセッツ州西部のアマーストにある私立のリベラル・アーツ・カレッジ。1821 年創立。新島襄（同志社大学創立者）の勧めで内村が入学（三年次編入）している。なお、新島の在学中、札幌農学校初代教頭で内村に絶大な影響を与えたウィリアム・スミス・クラークが教鞭を執っており、新島もクラークの授業を受講している。また、新島のアドバイザー、またホストファミリーとして新島に大きな影響を与えたシーリー教授は、後に内村がアマーストへ留学した際の総長（学長）。「余輩は先生（シーリーのこと）に依りて始めて基督教の何たるを知り」（内村鑑三全集 12 巻 p.97）と述べるほどに、内村もシーリーとの出会いによって人生を変えられた。
- (15) Johann Wolfgang von Goethe (1749 ~ 1832)、ドイツの詩人・作家・劇作家。

- (16) 特に 1968 年から 69 年にかけて日本全国で盛んになった学生運動である全共闘運動の中で起きた事件。全共闘とは全学共闘会議の略で、諸大学に結成され、連鎖反動的に行われた闘争の中心的存在だった。運動の最盛期には全国の 165 大学が紛争状態になり、70 大学でバリケード封鎖が行われた。東大では、1968 年 3 月、学生たちが安田講堂を占拠。総長の要請を受けて機動隊が構内に出動すると、ほかの学生たちにも反発が広がり、10 月には無期限ストに突入した。1969 年 1 月、学生約 400 人と警官約 8,500 人が 2 日間にわたって繰り広げた攻防戦が安田講堂事件。
- (17) 1971 年 7 月設置。2001 年 1 月から環境省。
- (18) 原書の表現は、現在では適切でないため一部を削除した。
- (19) 千葉県成田市にある真言宗智山派の大本山。
- (20) 原書の表現は、現在では適切でないため改めた。
- (21) 天から与えられた職。また自分の才能などに最もふさわしい職業。
- (22) (1537 ~ 1598、1536 ~ 説もあり)、戦国・安土桃山時代の武将。
- (23) 摂政 (君主が変わって政務を行う者) または太政大臣 (国政を総括する最高機関の最高位) の敬称。
- (24) キュウリ・スイカ・カボチャ・ヘチマ・ユウガオなど、ウリ科の植物の総称。特に、シロウリ、マクワウリのこと。
- (25) 使用人のかしら。
- (26) 山梨県都留市を中心とする地方で生産される伝統的な絹織物。かいきぬとも読む。
- (27) 慶應義塾には幼稚舎 (初等教育) から大学科までの一貫教育の体制があり、現在の普通部は中学校に相当する。ただし、鈴木が在学した頃の普通部は、就業年数 5 年の旧制中学校。
- (28) たとい。仮に。万一。
- (29) 官立の学校。国公立の学校。⇔私学。
- (30) 旧制高校の一つ。1908 年 (明治 41 年)、名古屋に開設され、1949 年 (昭和 24 年)、新制名古屋大学に統合された。
- (31) 別荘。ビラ。
- (32) William Merrell Vories (1880 ~ 1964)、アメリカ・カンザス州出身のキリスト教伝道者、YMCA 活動家、社会事業家、建築家、近江兄弟社創立者。さらには詩人や音楽家でもあった。(今野和子氏が公益財団法人近江兄弟社の囑託研究員・芹野与幸氏に確認したところ、ヴォーリーズは神学校を卒業しておらず、公的な資格を得た宣教師ではなかったため、キリスト教伝道者ではなく YMCA 活動家とするほうが正確かもしれないのご助言をいただいた。しかし、鈴木にとってのヴォーリーズは、紛れもなくキリスト教伝道者であっただろうことに鑑み、ここではあえて「キリスト教伝道者、YMCA 活動家」と並記した。) 1905 年にキリスト教伝道のため来日し、滋賀県立八幡商業学校の英語教師となった。バイブルクラスを始めたところ大勢の生徒が集まったが、キリスト教の布教に反対する地元民の意を汲んだ滋賀県教育委員会は、契約更新に際し、バイブルクラスの活動を自粛することをヴォーリーズに促した。しかし、ヴォーリーズはこの要求を受け入れず、自ら解職を希望し、1907 年 3 月に離職した。離職直前の 2 月には、ヴォーリーズが設計した八幡基督教青年会館 (YMCA) が竣工。1908 年 12 月ごろ、京都 YMCA 会館の一室に

設計監督事務所を開設。当時夏の軽井沢に集まっていた在日宣教団体との接点から、戦前までも日本全国で 1,000 件を超える学校、住宅、病院などの建築に携わった。現存するヴォーリズ設計の建物としては、大阪と京都のデパート、関西学院、神戸女学院、現在の山の上ホテル（東京都千代田区）などが特に有名。設計事務所は戦時中に一時解散したものの、戦後に復活し、株式会社一粒社ヴォーリズ建築事務所として今日に至っている。1910 年に教え子の村田幸一郎、吉田悦蔵と共に結成した近江ミッションは、1934 年には近江兄弟社、1944 年には株式会社近江兄弟社となった。1919 年に華族の 一柳満喜子と結婚し、1941 年に日本に帰化。1920 年に満喜子が自宅を開放して始めた町の子どもたちのためのプレイグラウンド・清友園（学童保育）は、1922 年に幼稚園として認可された。また、1933 年に吉田悦蔵がメンソレータム工場の従業員のために始めた近江兄弟社女学校も、1943 年に高等女学校の認可を得た。戦後、1947 年に小学校と中学校を開設、1948 年に近江兄弟社女学校は男女共学の近江兄弟社高等学校となった。1951 年に幼稚園、小学校、中学校、高等学校からなる近江兄弟学園（現ヴォーリズ学園）を設立し、ヴォーリズが理事長を、満喜子が学園長を務めた。ヴォーリズは 1934 年 4 月 29 日に叶水の鈴木宅（現在の独立学園だが、来訪時は基督教独立学校創立の 4 ヶ月ほど前）を訪問している。ヴォーリズについては、近江兄弟社の註も参照されたい。

- (33) 荷物が重すぎる。また負担や責任が重すぎる。
- (34) 1923 年 9 月 1 日午前 11 時 58 分に発生した地震。マグニチュード 7.9、南関東で震度 6。死者・行方不明者は 10 万 5,000 人余り。震災の混乱に際し、朝鮮人虐殺事件などが発生した。
- (35) 未熟。中途半端。
- (36) Dante Alighieri (1265 ~ 1321)、イタリアの詩人。主著である神曲は、1307 年 ~ 1321 年作の詩編。地獄編・煉獄編・天国編の 3 部に分かれる。
- (37) 原書の表現は、現在では適切でないため改めた。
- (38) 都会から遠く離れたへんぴな土地。へき地。片田舎。
- (39) 航空機を撃墜するための中小口径の砲。
- (40) 軍隊で、師団・旅団の下、大隊の上に位置する部隊。
- (41) 招集に応じること。特に、旧軍隊で在郷軍人（平時は民間にあり、戦時に際して招集される軍人）が招集に応じて指定の場所に集まること。
- (42) Hans Christian Andersen (1805 ~ 1875)、デンマークの詩人・作家。デンマーク語名はアナセン。
- (43) 日本最高の勲位。
- (44) (前 372 ~ 前 289) 中国、戦国時代の思想家。
- (45) 朝廷・政府に仕えない人。民間の人。在野の人。
- (46) 世間に名がよく知られていること。
- (47) (前 480 頃 ~ 前 390 頃) 中国、春秋戦国時代の思想家。
- (48) 世間一般。
- (49) 矢内原忠雄が発行していた個人雑誌。
- (50) (~ 1984) 山形大学教授。1951 年から長年にわたり独立学園で特別授業を行った。また、山

- 形大学のキリスト教青年会である磐上会の学生たちを引率し、度々独立学園を訪問した。この訪問は、創立当初の独立学園生に自信を与えたと言われる。
- (51) (1890 ~ 1975) 内村門下のキリスト教伝道者。大正末期から昭和の初期にかけて、山形県鶴岡市を中心に、庄内地方の最上川以南の 146 もの村落で農村路傍伝道を行った。祖父は山形県酒田市生まれ。5 人兄弟の末っ子だった父が山形県鶴岡市の諏訪家に婿入りした。諏訪熊太郎も 5 人兄弟の末っ子で、長男。諏訪を恩師と呼び、酒田市で広岡聖書研究会を開いた久保伊作は、諏訪の従兄弟の子にあたる。その久保の著書である『農夫が語るキリスト教』には鈴木が序文を寄せている。なお、久保伊作の弟・源蔵は、独立学園元理事長・白崎吉郎の姉の夫。白崎は若き日に諏訪の講義を聴いた時のことを以下のように記している。「先生はいつも講義のときは、羽織袴の姿にて端然と座り、(中略)御講義が熱し最高潮に達するや、大声を張りあげ、障子に響きわたり、又テーブルを叩き真剣勝負そのものでありました。私達は頭の先から足の裏迄、電気の様なもの走り緊張致しました。」(『マタイ伝山上垂訓・ヨハネ伝告別遺訓 素人講義』p.8) 諏訪については本書 6-10、6-11 も参照のこと。
- (52) 山形県東根市。
- (53) 宮城県仙台市青葉区と山形県東根市との間にある峠。国道 48 号線が走る。
- (54) 宮城県仙台市青葉区。温泉地。
- (55) 原書の誤植を修正した。
- (56) (~ 1982)、1956 年から 1973 年まで独立学園旧講師。その間、毎年来校し、絵画の授業を行った。敗戦後の食糧難にあっても法を守るためヤミ米(不正規流通米)を口にせず、極度の栄養失調がもとで死亡した裁判官・山口良忠(1913 ~ 1947)の妻。
- (57) 台湾出身の外科医。夫人は陳福子。夫婦共に矢内原集会の会員。陳は独立学園卒業生を看護師見習いとして雇用するなどして独立学園を支援した。
- (58) 米沢市に居住し、佐藤のぶと共に聖書集會を開いていた。
- (59) 米沢市に居住。くる病で歩けなかったが、後に歩けるようになった。政池仁発行の「聖書の日本」の古くからの読者であり、矢内原発行の「嘉信」の読者でもあった。確かではないが、鈴木が葉水移住の精神的な支えとなったという証言もある。また鈴木が葉水から山形県内や全国各地へ伝道旅行などに出かける際には佐藤宅に宿泊することも多かった。第二次大戦中、ホーリネス教団の指導者などとして著名な米田豊牧師(1884 ~ 1976)の妻と娘・恵が佐藤家近くの南雲家に疎開していた。米田自身はホーリネスの信仰のゆえに 1942 年 6 月に逮捕され、裁判で実刑判決を受けていた。(1945 年 4 月に保釈。)佐藤は疎開中の米田母娘の世話をした。鈴木のお甥である天野隆治は当時も度々葉水を訪れており、その際に佐藤とも会っていた。佐藤が仲人のような役割を果たし、後に米田恵と天野隆治は結婚。ホーリネスの重鎮である米田の娘と無教会の鈴木のお甥とが結婚するのは大問題だったようだが、結婚披露宴は和やかだったと出席者の一人は回想している。なお、天野隆治は 1985 年に独立学園副校長に、天野恵は職員となった。
- (60) 多くの場合骨の成長障害および骨格や軟骨部の変形を伴う病気。
- (61) 独立学園の最寄り駅。現在でも距離的には最寄りだが、横川ダム建設にともなう子持トンネル開通以降は、若干遠い小国駅を利用することが多い。

- (62) (1918 ~ 2014) 独立学園旧講師、村上聖書集会を主催。朝鮮生まれ。1937年、京城師範学校卒業、1945年に日本へ引き揚げるまで小学校や国民学校で勤務。京城師範学校在学中に、友人から聖書と金教臣、矢内原忠雄を紹介され、「聖書朝鮮」、「嘉信」を読むようになった。戦後、新潟県の小学校教諭、中学校教諭となり、勤務した最後の2校では校長を務めた。退職後、独立学園講師として国語の授業を担当するかたわら、夜には有志参加の韓国語講座を開き、朝拝では韓国語讃美歌の指導などを行った。韓国からの来客の際の通訳としても活躍した。
- (63) 父は独立学園元理事長の白崎吉郎。
- (64) 天に昇ること。死ぬこと。
- (65) ここでは、死ぬこと。
- (66) 年齢の数え方。生まれた年を1歳として、正月ごとに1歳を加えていく。
- (67) 独立学園の歴史を影絵で表現したもの。ここでは「影絵物語」と記されているが、現在はシルエットと呼ばれ、創立記念式の前夜に上映される。
- (68) 山形県西置賜郡白鷹町荒砥。
- (69) 狐越街道。山形県西置賜郡白鷹町と山形市を結ぶ県道17号線。
- (70) 小国町内の廃道。200メートルにわたる断崖絶壁の岸壁を開削して道路を通したところ。半分が洞門(トンネル)のようになっていることから片洞門と呼ばれている。
- (71) めったに見られない、素晴らしい景色。
- (72) 1898年6月、内村鑑三が主筆となって創刊した雑誌。本誌で内村は、痛烈な時事評論をもって社会問題の解決につとめようとした。その基本は個人の独立、自由思想、平民主義の普及にあった。
- (73) 現在の国立療養所星塚敬愛園のこと。全国に13か所ある国立ハンセン病療養所の一つ。1935年開設。
- (74) (1917年~没年不明)、星塚敬愛園や沖繩愛楽園というハンセン病診療所で看護師として働きながら、矢内原忠雄に師事した。矢内原は井藤を「私の娘のように親しい者」(矢内原忠雄全集23巻(岩波書店)p.459)と述べている。
- (75) 無教会のクリスチャン。戦後は荒砥(現在の白鷹町)に居住、その後仙台へ移り、尚綱学園で教職に就いた。1948年5月26日の独立学園創立式において祝辞を述べている。
- (76) 内村鑑三の娘。1912年1月12日、原因不明の病により18歳で死去。
- (77) 現実社会と関わらない研究生活。
- (78) 哲学で、人間は意識に与えられる感覚的な経験の背後にある客観的な実在は認識できないとする立場。
- (79) 吉田悦蔵(1890~1942)のこと。ヴォーリズと吉田と村田の三人は、近江兄弟社の創立者として終生結束が固かった。
- (80) 村田幸一郎(1887~1956)のこと。
- (81) David Graysonは、アメリカのジャーナリスト、歴史家、伝記作家であるRay Stannard Baker(1870~1946)のペンネーム。
- (82) *Adventures in Contentment* (1910)。邦訳は出版されていない。

(83) *The Omi Mustard Seed*, 1907年にヴォーリズが創刊した雑誌。

(84) 11.2651km。

(85) 詩の原題は"May First in Oguni"（「5月1日の小国」の意）。アメリカの詩人ホイットティア（John Greenleaf Whittier, 1807～1892）の "Snow Bound"（「雪に閉ざされて」の意）という長編詩を土台としており、引用や言い換えが多数なされている。「雪に閉じ込められた5月1日」という題は、ヴォーリズの詩の題とホイットティアの詩の題を合わせて訳したものと考えられる。なお、ヴォーリズが置いていった"May First in Oguni"の原本は、独立学園内に保存されている。また、ホイットティアの"Snow Bound"の原文と全訳は、独立学園卒業生が^{ほんやく}翻訳した『雪に閉ざされて』（新教出版社）という^{しょせき}書籍となっている。以下が、ヴォーリズの詩"May First in Oguni"全文と日本語の大意。

May First in Oguni (1934)	5月1日の小国
The sun that rose that first of May	5月1日に昇った太陽は
Was quite eclipsed by clouds of gray;	灰色の雲にすっかり隠れていた
It neither portent was nor threat,	それは不吉なことや恐ろしいことの前兆ではなかった
And did not rise nor did not set,	太陽は昇りも沈みもしなかった
As far as any human eye	一生懸命目をこらして
Could peer into the lowering sky.	雪雲をじっと見つめた
Unwarmed by any sunrise light	陽の光に暖められていない灰色の昼は
The gray day turned at length to white,	ついに白く変わった
For o'er the drifts, unmelted still	田んぼや谷や森や丘の
On field and valley, wood and hill,	まだ溶けずに残っていた雪の上
Began a magic cloak to grow,	ふかふかの新雪が縦糸と横糸となって
Whose warp and woof were fleecy snow.	魔法のマントが編まれはじめた
Shut in from all the world without,	外の世界から切り離されて閉じ込められ
We sat the roaring stove about,	私達は音を立てて燃えさかる ^{まき} 薪ストーブの周りに座った
Content to let the snowstorm pour	吹雪が窓やドアに雪を浴びせかける
Its content 'gainst our pane and door.	私達はそれをそのまま受け止めた
What matter how the day behaved?	どんな日になろうとかもうものか
What matter how downpour raved?	どれだけ吹雪が ^{うな} 唸ろうとかもうものか
Snow high, snow low, not any drift	高くまた低く吹きつける雪も
Could find within our walls a rift!	私達の壁に裂け目を見つけることはできない
And just to make our sojourn wittier,	そしてただ私達の滞在をより機知に富ませるために
We read again "Snowbound" by Whittier .	私達は再びホイットティアの「雪に閉ざされて」を読んだ
O Time and Change! — how strange that May	ああ時よ、そして変化よ! — なんと不思議なことか
Should start out with a wintry day!	冬のような一日から5月が始まるとは
W.M.V (ヴォーリズの名前、William Merrell Voriesのイニシャル)	

(86) 新しい建物を神に^{ささ}げること。

- (87) 軍隊で、戦闘の指揮をする士官。少尉以上の武官。
- (88) 招集を解かれた兵士が帰郷すること。
- (89) 第二次大戦中、多くの宣教師は強制帰国させられたが、国内に残っていた宣教師は主に軽井沢に集められた。日本に帰化し、妻・一柳満喜子の籍に入り、一柳米来留となっていたヴォーリズさえもその例外ではなく、1941年から1945年にかけてヴォーリズ夫妻（一柳夫妻）は、日本に残った宣教師たちとともに、寒さと食料不足の中、軽井沢に蟄居（家に籠もって外出しないこと）せざるを得なかった。ただし、蟄居期間中であってもヴォーリズは、東京帝大の講師として毎週上京していた。
- (90) 独立学園卒業生、旧職員。結婚後、夫妻でネパールでの伝道活動に従事した。父は独立学園元理事長。
- (91) 本書9章に英文を収録。
- (92) (1878～1967) 外交官・政治家。1948年～1954年に首相を務め、戦後政治の基本路線を定め、親米政策を推進した。1951年、サンフランシスコ講和条約に調印した。
- (93) 学問の真理を曲げて、世間や権力者におもねること。
- (94) 機嫌をとって相手の気に入るようにする。へつらう。
- (95) ここでは、ソ連を含む一切の敵国との講和を結ぶこと。吉田茂が調印したサンフランシスコ講和条約（対日講和条約）では、連合55ヶ国のうちソ連などを除く48カ国だけが参加し、全面講和は成らなかった。
- (96) *Alice's Adventures in Wonderland*。作者はイギリスの童話作家・数学者のルイス・キャロル(Lewis Carrol, 1832～1898)、1865年刊。
- (97) 原書の表現は、現在では適切でないため改めた。
- (98) アラビア半島とアフリカとの間にある海。
- (99) 交戦中のある一国がその同盟国から離脱して単独で結ぶ講和。ここでは、ソ連などを含まない敵国との講和。
- (100) 日米安全保障条約。1951年9月、サンフランシスコ講和条約調印と同時に締結された、日米間の軍事的関係を規定した条約。講和後も米軍が日本に駐留することや、米国の集団的自衛権を行使して日本を防衛する義務の根拠になっている。
- (101) 中東での戦争や革命による石油の減産や値上げにより、世界経済が大きな影響を受けること。
- (102) 外国の貨幣。輸出が多いと増える。
- (103) 憂き身をやつすとは、辛いことの多いのが外見にも現れるほどに苦労すること。また身の瘦せるほど物事に熱中すること。また、無益なことや本業でないことに熱中すること。
- (104) 原書の表現は、現在では適切でないため改めた。
- (105) Douglas MacArthur (1880～1964)、アメリカの軍人。元帥。太平洋戦争開戦時の極東軍司令官。日本降伏後は連合軍最高司令官として日本占領にあたった。1951年、朝鮮戦争処理問題で解任された。
- (106) 軍人ではないが軍に所属する文官など。
- (107) わき目もふらずに夢中で走り回ること。ある目的のために懸命になって動き回ること。

- (108) 国家の代表として地方や他国に派遣される人。
- (109) 原書の表現は、現在では適切でないため改めた。
- (110) 戦後、1948年に発足した現在の高等学校の制度。新制高校。
- (111) 山形県の北西部。鶴岡市、酒田市がある地域。
- (112) 山形県の南東部。
- (113) 2001年から他省庁と共に総務省に改組。
- (114) 現在は山形県長井市。
- (115) 古今和歌集。勅撰和歌集の始まり。905年または914年頃成る。約1100首を収録。
- (116) 擅は、ほしいまま、自分の思うとおりにふるまうさま。
- (117) 内村鑑三全集 6巻 p.174以降に収録。
- (118) (825～880) 平安初期の歌人。
- (119) 天地万物を創造し、育てること。また造物主によって作り出された天地万物。自然。
- (120) 詩作のもとになる感情・着想。詩にうたわれている思想・感情。
- (121) 括染は、布を部分的につまみ、糸でくくって染め残しをつくり、さまざまな模様を染めること。また、そのように染めたもの。
- (122) 神話で神武天皇以前の神々の時代。
- (123) 世俗の名利にばかりとらわれて精神活動に関心の薄い人。また、実利にばかり心を奪われて学問や芸術に関心の低い人。
- (124) ふつうとは変わっているようす。
- (125) この上なく優れていること。
- (126) そうであるのに。それなのに。
- (127) 地方から都へ出ること。上京。
- (128) 現在の東京都新宿区上落合、東京メトロ落合駅周辺のことと思われる。
- (129) 無教会のクリスチャン。山形県内に住んでいた数少ない内村門下として、鈴木らと親しい交わりがあった。
- (130) 浄土真宗のこと。
- (131) 男性の老人の敬称。
- (132) 形だけ高い地位に置くこと。
- (133) 公務員の住宅として政府や地方公共団体などが設けた住宅。
- (134) 1886年(明治19年)に初めて設置された旧制の小学校。満6歳で入学。修養年限は4年だったが、1907年から6年になった。
- (135) 今と昔を思い比べて、その違いの大きさに対して抱く感慨。
- (136) ちょうどよいことには。
- (137) 漢詩作法における、韻律を整えるために規定される規則的な配列。
- (138) Walt Whitman (1819～1892)、アメリカの詩人。自由な形式で、自然や民衆の生活、また民主主義・平和・進歩などを歌い、アメリカ民主主義の代表的詩人とされる。
- (139) 漢詩形の一つ。七言四句から成る。

(140) 大意は次の通りと思われる。なお、本文中の読みは、例として PDF 化にあたり追加した。

「独り闘うこと三十年に及んだ／思い返せば神への感謝の涙を押さえきれない／反対をどうして恐れることがあろうか（恐れることはない）、所詮は悪魔の輩のすることである／勇んで進もう、十字架の旗を高く掲げて」

(141) 原書の表現は、現在では適切でないため改めた。

(142) 内村加寿子、内村の二番目の妻。不敬事件の約三ヶ月後に病死した。

(143) 内村の 1922 年 2 月 19 日の日記に次の通りに記されている。（内村鑑三全集 34 巻 p.20）

中央講演会、例会以上の盛会であつた、傍聴人の制限に苦心した、今日会衆七百人を超へ、其収容着席に困難した、研究の題目は「三つの呻き」であつた、多分余が為すことを許されたる聖書講演中最も雄大なる者であつたらう、縦し講演其物はさうでなかつたとするも、題目だけはさうであつた、宇宙と靈魂と聖霊とが呻きつゝ基督者の信仰を証明すると云ふのである、之よりも大なる問題のありやう筈はない。

(144) 諏訪熊太郎の著書。初版は 1950 年に聖泉会刊。その後、1975 年にキリスト教図書出版社から改訂版が出版された。

(145) 福岡県出身。旧満州で本間定夫と知り合う。本間定夫は菊竹の妻の妹の夫。旧満州から引き揚げ後、本間の故郷である小国町に住み、菊竹塗装店を営んだ。妻の甥で養子とした子・敏光は初期の独立学園卒業生。菊竹塗装店を継ぎ、独立学園を支えた。

(146) 中国の港湾都市。1898 年、ロシアが租借（他国の領土の一部を借りること）してダルニーと命名、日露戦争後、日本の租借地となった。

(147) 社会活動を重んじるキリスト教プロテスタントの教派。1865 年にロンドンのスラム街でウィリアム・ブース牧師夫妻らによって始められ、1878 年から救世軍（The Salvation Army）という名称となった。軍隊方式の組織を採用しているのが特徴で、ロンドンに万国本営を置き、世界各国に本営一連隊一小隊一分隊などの組織を置いている。日本では山室軍平（1872 ～ 1940）が中心となり日本救世軍が発展し、特に廃娼運動や結核療養所設立などの社会奉仕活動によって注目された。

(148) （生年不明～ 1947）第二次大戦中の日本救世軍（救世団）の指導者。

(149) William Booth (1829 ～ 1912)、救世軍の創始者。

(150) 小国町南部の小玉川地区出身。旧満州で菊竹種次と知り合う。小国に引き揚げ後、本間建設を創業した。この式辞を要約した建築家・本間利雄の養父。

(151) 脳の血管の障害によって、手足などの麻痺を起こす病気。脳出血・くも膜下出血・脳梗塞など。

(152) (1931 ～ 2018)、山形県を代表する建築家。独立学園のある小国町出身で、若き日に鈴木により信仰に導かれた。独立学園の管轄係を自認し、現校舎・講堂など、さまざまな施設の建設・維持・管理に尽力した。

(153) 内村が開いていた毎日曜の柏木集会の、午前のこども向けの会のことと思われる。鈴木が手伝うことになった経緯は、本書 8-1-3 を参照のこと。

(154) 畔上賢造(1884 ～ 1938)、内村鑑三の助手、独立伝道者。内村の著書『羅馬書の研究』は畔上

の編集による。

- (155) 塚本^{つかもと}虎^{とら}二(1885 ~ 1973)、キリスト教伝道者。内村門下であったが、のちに内村から独立した。
- (156) 東京都^{としま}豊島区の一部。
- (157) 東京都^{すぎなみ}杉並区の一部。
- (158) ローマの信徒への手紙 7 章 24 節。(新共同訳)「わたしはなんと^{みじ}惨めな人間なのでしょう。」
- (159) 神や目上の者が、人間や^{めした}目下の者の言動をよしとして、ほめること。